九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドとナチュリスム : サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエとの往復書簡

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1430755

出版情報：Stella. 32, pp.221-260, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッドとナチュリスム

――サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエとの往復書簡――

吉　井　亮　雄

フランス文学が1890年代半ばにひとつの転換期を迎えていたことは疑いを容れない。科学主義とその文学的変奏たる自然主義は，さまざまな分派を生みながらも依然として堅固な基盤のうえに立っていた。いっぽう象徴主義はたしかに一時代を画したものの，マラルメ提唱の諸理念を絶対の規範と仰ぐ傾向は次第に弱まり，むしろ過度に〈生〉から遊離した芸術にあらがう動きが勢いを増してくる。年長世代を麻痺させていた観念的美学に代わり，生への渇望が青年たちを突き動かし始めたのである。彼らの主張はまだ広く一般に浸透していたわけではないが，過去数年間に発表された作品からいくつかを挙げるだけでも新たな精神風土の誕生は容易に看取できる――たとえばブールジェ『弟子』(1889)，バレス『法則の敵』，クローデル『都市』(共に1893)，マルセル・シュオッブ『モネルの書』(1894)，ベルクソン『物質と記憶』(1896)……。

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエを若き領袖とする文学運動「ナチュリスム」は，象徴主義への反動傾向のなかでもひときわ声高に「生への回帰」「自然への回帰」を謳ったが，実際には理論に見合うだけの傑出した作品を産むことができず，わずか数年で急速にその輝きを失った。必然的に今日ではこの流派にたいする認知度は総じて低く，研究言説の数量もまだまだ限定的なレベルにとどまる。しかしながら，たとえ短期間であったにせよ，同派の主張・活動がジッドやジャム，ポール・フォールら同時代の作家・詩人たちの関心と反発とを誘いつつ，19世紀末から20世紀初頭にかけて新たな文学環境の醸成に少なからず関与したことは紛れもない事実である。本稿では，現存の確認されたジッドとブーエリエの往復書簡（全15通，内10通が未刊）を訳出・提示し，両者の関係を実証的に跡づけたい。当該コーパスは，第1次大戦中や晩年の挿話的証言を含むものの，大方はナチュリスムをめぐる初期の書簡交換であり，総数

じたいの少なさとともに，両作家の実質的な交流が長くは続かなかったことを如実に示す。本稿の標題に「ジッドとナチュリスム」を掲げた所以である[1)]。

*

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ（本名ステファヌ＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ＝ルペルティエ）は，1876年5月19日，ジャーナリストで文人の父エドモンと母ジャンヌ・ルージュレの長子としてオー・ド・セーヌ県リュエイユに生まれた。ジッドより7歳年下である。ヴェルサイユ高等中学，次いで名門コンドルセ高等中学に学び，在学中から詩や小説をものした早熟な青年であったが，まずはごく簡略にその初期の活動を述べておこう[2)]。

1893年2月，大胆不敵にも『アカデミー・フランセーズ』と題する雑誌をヴェルサイユ，コンドルセ両校を通じての友人モーリス・ル・ブロン（後にゾラの娘ドゥニーズと結婚）と共同で発行したのが文学活動の第一歩であった。漠然たる神秘主義信奉のもと，ヴェルレーヌやローラン・タイヤード，ポール・アダン，アドルフ・レッテ，アンリ・ド・レニエ，フランシス・ヴィエレ＝グリファンらを受け手に想定したこの小雑誌は，独創性と呼べるほどの特徴は備えていなかったが，新世代の文学を樹立しようとする意気込みだけは旺盛であった。ブーエリエは「我らは来たるべき種族の第一陣なり」と誇らしく宣言し，自身が「未来の芸術」の師と見なす若き作家・詩人のなかにジッドの名を挙げていた。この『アカデミー・フランセーズ』はわずか2号を出しただけで『被昇天（ラソンプシオン）』に引き継がれる。新雑誌の目次にはブーエリエ，ル・ブロンのほかに，レッテやエマニュエル・シニョレ，ポール・ルドネルらの名が並び，内容的には宗教感情と耽美とが混淆した神秘主義傾向がいっそう顕著になる。だがこの後継誌も2号のみ（3－4月）で終刊となり，続いては6月からブーエリエの単独執筆による「不定期刊行の夢と愛の小冊子」『受胎告知（ラノンシアシオン）』が計5号発行された。神秘主義は93年当時の流行（はやり）ではあったが，少なくともブーエリエがそこに認めた感情性，彼が付与した英雄的夢想や，無垢な現世界という主題の萌芽は，すでに後のナチュリスト的思想の幾分かを予告するものであった。

年が明け1894年になるとグループ化が進み，オランダ人ジャック・ドレス，アンドリエス・ド・ローザ（アルマン・デュ・ロッシュの筆名），アルベール・

フルリー，ジョルジュ・ピオッシュといった青年たちが順次参加・合流してくる。同年5月に創刊された新雑誌『夢とイデア』（翌年5月までに計6号を発行）において，ル・ブロンは象徴主義・レアリスムをともども斥け，熱狂的な「新たな信仰」のうちに「新世代の神秘主義」を見出そうとする。いっぽうブーエリエは象徴主義の恩恵を認めつつも，それを越えた地点を目指そうとした。総じて言えば，ヴェルレーヌとヴィエレ＝グリファンにたいする崇拝，感覚よりは感情性を基盤とする反主知主義，そして現実との和合による象徴主義超克への志向――これが同誌の主たる傾向であった。

翌1895年はナチュリスム旗揚げの年となる。今やグループは当初の絶対的イデアリスム，形而上学的神秘主義を脱し，ひたすら事物や自然との全面的な一体化（コミュニオン）を謳っていた。11月創刊の機関誌も文字どおり『ナチュリスム資料（ドキュマン・スュル・ル・ナチュリスム）』と銘打たれる（同誌は96年9月の第11号をもってひとまず終刊[3]，97年3月からは後継の『ナチュリスム評論（ラ・ルヴュ・ナチュリスト）』が1901年11月まで計35号発行される。ちなみにこのナチュリスムという語は，数カ月前〔『若き芸術』誌3月15日号〕，ベルギーの詩人アンリ・ヴァンドピュットが広く「自然への回帰」一般にたいする願望を指して用いたものであった[4]）。とりわけ領袖のブーエリエは雑誌創刊に先立ち，ヴァニエ出版から立て続けに3冊の「トレテ」を上梓し，弱冠19歳での作家デビューをパリ文壇に強く印象づけていた。3冊とはすなわち，「ある悲劇ないし小説の序となるべき熱情の理論」の副題を冠した『冒険者・詩人・王・職人たちの英雄的生涯』（2巻本），「風景の理論」たる『神々の復活』，そして「愛の理論」の『ナルシスの死にかんする論述，あるいは差し迫った必要』である。さらに翌96年の夏には，メルキュール・ド・フランスから10月に同時出版の予定として，グループの作品4点（ル・ブロン『ナチュリスム試論』，ウージェーヌ・モンフォール『シルヴィー，あるいは熱きときめき』，フルリー『途上にて』，そしてブーエリエ『瞑想の冬』）が告知される……。かくのごとく同年の半ばには，新流派はすでにそれなりの知名度を獲得していたのである。

グループの牽引役ブーエリエの存在感は抜きん出ていた。そのことを証する一例として，やはりコンドルセの学友で，後には『レ・マルジュ』誌（第1次は1903-08年）を創刊・主宰し自らも一派をなすモンフォールは，当時のジッド宛書簡で次のように述べている――「ブーエリエは偉大です。彼の天賦の才は

真実そのもののように素晴らしい」，あるいは「彼が通りすぎる，するとそれまでは閉じていた多くの窓が開き，我々が忘れていた数多の歓びが再び見出されるのです」[5]……。後述するレッテと同じくブーエリエがマラルメを批判し始めたのはいささか遺憾なことであったが，『地の糧』を執筆中のジッドにとって，いかにも自作の主題に直結しそうな彼の主張や運動はもはや無視しえぬところとなっていたのである。

8月18日，滞在中のキュヴェルヴィルからフランシス・ジャムに宛てた書簡でジッドは次のように問う――「君がサン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエのことをどう考えているかが知りたい。というのも，今や彼について話すべき時だからだ！ 君は彼と文通をしているのだろうか。彼にたいする君の意見がとりわけ知りたいんだ。君はナチュリストなのかい？」[6]。オルテーズの詩人から便りが返ってくるのと相前後して，パリからは『ナチュリスム資料』の最新号が届く。その礼も兼ねてジッドが意を決しブーエリエに送ったのが次の書簡である（宛先は雑誌の扉に記された編集長ル・ブロンの自宅気付[7]）――

《書簡1・ジッドのブーエリエ宛》

〔キュヴェルヴィル，1896年8月24日〕月曜夜

『ナチュリスム資料』第9-10〔合併〕号を頂戴したのが貴方のお陰かどうか存じませんが，仮に寄贈のお礼を申し述べるのが慎重さに欠けることだとしても，少なくとも〔同号に『瞑想の冬』の〕「序言」をお書きくださったことに対しては感謝申しあげても差し支えありますまい[8]。

「ブーエリエのことを好きか，と君は僕に尋ねている」（友人のフランシス・ジャムがまさに今朝そう書いて寄こしましたが，この返事からは私が彼にどんな質問をしていたかがお分かりでしょう）――「彼のものはほんの少ししか読んでいないが，おそろしく見事だと思ったので，昨日そのことを〔ポール・〕フォールに書き送った」[9]，云々。この冊子を戴いたことは（それが貴方からであろうと，〔『ナチュリスム資料』の版元〕ヴァニエからであろうと）口実にすぎません。貴方をいたく崇敬しているからこそ，お手紙を差し上げるのです。ご著述は貴方が生まれながらの作家であることを示していますが，私の崇敬の念はそういった外的な面だけに対するものではありません。我々に共通すると思われるもっと核心的な要素にたいする極めて強い共感なのです。言葉では表現しきれないと分かっておりますので，無理にご理解いただこうとは思いません。しかしたとえ上手くご説明できぬとしても，少なくともこの共感の念が真実であるのは憚りなく断言しうるところ。どうか私を貴方の同志（*corréligionnaire*）とお信じいただきたく。

アンドレ・ジッド

いかにジッドが強い関心を寄せていたとはいえ，なんと熱烈な称賛，なんと積極的なアプローチであることか。

この「まるで別の惑星から落ちてきたかのような不意の手紙」[10] にたいし，旅行先からパリに帰ったブーエリエは次のような返書を送る――

《書簡 2・ブーエリエのジッド宛》

パリ，1896 年 9 月 4 日

ブルターニュからオランダまでを経巡る旅から戻り，貴方の心のこもった素晴らしいお手紙を有り難く拝受いたしました。無謀なほどに感情を隠すことなく書いてくださったのですから，私の方でもそんな貴方への感謝の念を，謙譲の表現や激しい言葉・優しい言葉で言い表してはならぬということがありましょうか。

たしかに我々は似た者同士，兄弟のような存在です。貴方がそう認め，その旨を手紙に書いてくださった。これこそ心地よくも魅力的なご指摘です。

貴方の作品すべてを読ませていただいたわけではありませんが，私の識るいくつかは「自然の楽園」を想わせるものでした。貴方は強烈な甘美さそのものです。純粋な堕天使の魔法のごとき心地よさが貴方の世界全体を美しいものにしています。貴方は模範的恩寵を身に備えておられるのです。

以上は私の偽りなき感想です。しかしながら，ここで私が用いうるどんな言葉も，貴方が私の心のなかに喚起なさった諸々の感情については何も伝えることはできないと分かっております。〔それほど〕貴方は私の心を激しく揺さぶったのです。ご高著のうち私がすでに読んでいるのは 2 冊の優美な小著書と，雑誌掲載された断章のいくつかだけですが，私には貴方が明晰なまでに美しく物悲しい存在であることがすでに感じ取れるのです。

私の思うに，まさに我々ふたりだけが今日確信をもって抱き合える物書く存在（êtres *écrivants*）なのです。敬具

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ

「我々は似たもの同士，兄弟のような存在」――ジッドの熱い呼びかけに応えて，ブーエリエもまた自分たち「ふたりだけ」が文学の徒として特権的に結ばれていると返す。はたしてこの言葉は心底からの想いなのか……。

書簡の記述についてひとつ補説しておくと，第 4 段落に言及されるブーエリエ既読のジッド作品は，いくつかの資料・証言によってある程度特定しうる。まず「2 冊の優美な小著書」については，内 1 冊が『ナルシス論』(1892)，もう 1 冊は『アンドレ・ワルテルの手記』(1891)，『アンドレ・ワルテルの詩』(1892)，『愛の試み』(1893) のいずれか（おそらくは後 2 書のいずれか）。また「雑誌掲載された断章のいくつか」については，後掲《書簡 5》の記述から，少なくと

も『ユリアンの旅』(1893) および『パリュード』(1895) のプレオリジナルが含まれていたのが確実である。ちなみにブーエリエの後年の証言によれば，これらのうち象徴主義の典型作『ナルシス論』は当時ナチュリストらの強い反発を買っており，前掲書『ナルシスの死にかんする論述』の執筆にも同作否定の意図が与っていたという[11)]。いっぽう『パリュード』が一派の賛嘆の対象だったことは後述のとおり。

9月末日，ジッドは一時(いっとき)パリに戻り2日ほどを慌ただしく過ごしたが，その折りの模様をベルギーの友人アンドレ・リュイテルス（後の『新フランス評論』共同創刊者のひとり）に報告している――「パリの喧噪は心地よかった。あちこちを回り，次から次へと感じの好い人たちに会った。なかでも，それまで面識のなかったポール・フォールとサン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエは魅力的だった」(10月4日，ラ・ロック・ベニャール発信)[12)]。この初対面にかんする具体的な資料・証言は，筆者が承知するかぎり皆無。ブーエリエとのあいだで突っ込んだ話が交わされたとは考えにくいが，少なくともこの時の好印象がジッドをさらに積極的な態度に出させたことは疑えまい。

同じ頃，あるいはやや遅れて，ジャムからナチュリスムにたいする態度決定を促す手紙が届く――

> この新しい文学はすべて，ナチュリストであるか否かを問わず，今やひとつの三角形から成りたち，将来もまたそうだろう。その三角形の各々の角(かく)が，君とブーエリエ，そして僕という訳だ。ベルギーまたはフランス〔の作家・詩人〕から僕が受けとる著作の相当数は，君＝ブーエリエ＝僕，ブーエリエ＝君＝僕，僕＝君＝ブーエリエ〔のいずれかの配列・配分〕を基本要素とし，それにフォールの影響が少々くわわったものだ。〔…〕
>
> 〔ナチュリストたち〕にとっては，すでに沈殿物がグラスの底で結晶となっている〔進むべき方向はすでに決している〕。君のほうはまだ態度を固めていない。この新たな流派は君が逃げ出すつもりなのか，とどまるつもりなのか，分からないでいるのだ。〔だが〕『地の糧』は，その題名からだけでも，君が僕らと同じくジャン＝ジャック〔ルソー〕やベルナルダン〔ド・サン＝ピエール〕と同族であることを示している。必要な場合には，そのことを〔ナチュリストたちに〕明言してもいいだろうか？ 君を望む声は多いし，僕の思うに，君が及ぼす影響は僕らの影響と重なり合っており，君としてはもう逃げ出すなんてことはできないだろう。[13)]

だがジッドはすぐには返答しない。一刻も早く果たすべき最優先の課題があっ

たからである……。

10月下旬，かねて予告のとおり『瞑想の冬』がメルキュール・ド・フランスから出来（しゅったい）する。ブーエリエは日をおかずこの新著を友人・知己に贈ったが（筆者が実見した日付入り献本としては，母ジャンヌ宛が26日付，盟友アルベール・フルリー宛が27日付），28日にキュヴェルヴィルからパリに戻ったジッドの元にも「我が崇高なる同志（フレール）アンドレ・ジッドに／サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ」と自筆献辞の入った豪華紙刷が届けられた[14]。翌日ジッドはジャムに手紙を送り同書の刊出を伝えるが，しかしながらそこには早くもナチュリスムにたいする違和感・警戒心のごときものが記されていた――

> 君に手紙を書かなかったのは仕事をしていたためだ。『地の糧』〔の執筆〕は進んでいる。僕について誤った考えが定着しないよう，なんとしても早く出版してしまわなければならないんだ。（僕の言わんとすることは君も分かるはずだ）。〔…〕
>
> 昨日から僕はパリにいるが，ブーエリエの本が出たので明日君に送ろう。この本が僕たちふたりの間に存在するのはよいことだから。[15]

この一節をとらえてクロード・マルタンが説くように，「生や自然を称揚する，それはよかろう。だがジッドは自身や『地の糧』をベルナルダン・ド・サン＝ピエール的なものとは考えていないのだ。然り，『瞑想の冬』はジャムと彼との違いを映すが，それにもましてブーエリエと彼とを分かち隔てる作品だったのである」[16]……。

にもかかわらずジッドは翌30日，アンリ・ド・レニエ，ポール・フォールのふたりと夜をともに過ごし，早くからナチュリスムに共感を寄せていた後者にブーエリエと懇談したい旨を伝えるのである。仲立ちをつとめた詩人によれば，「ジッドは貴方〔ブーエリエ〕の見事な作品と貴方自身にかんする大きな論文を『メルキュール・ド・フランス』誌に書く決心を固めました。〔…〕もはや彼に迷いはなく，論文は11月の掲載となるでしょう」，云々（10月31日のブーエリエ宛書簡[17]）。かくて懇談は11月4日の午後9時，パリ6区サン＝プラシッド通りのフォール宅においてと決まった。

この出会いはジッドがナチュリスムへの懐疑心を深め，ひいては自ら約した「大きな論文」の執筆を断念する最初の契機となるものだが，以下では暫しのあいだ，本文ないし註で実証面の補説をくわえながら，関連の書簡・証言にも

とづき10月末から翌年初頭にかけての流れを追うことにしよう。

*

ジッドがすでにブーエリエ一派のことを妻マドレーヌに語っていたのは間違いない。著者から『瞑想の冬』を寄贈されるや自らも彼女用に1部を買い求めるが[18]，キュヴェルヴィルへ郵送のさい同著を評価する旨を書き添えたのだろう，10月31日付のマドレーヌの返書はその意見を認めず，ナチュリスムに傾くかのような夫に自制を求めている――「ブーエリエの本が『地の糧』より優れている？ 私は絶対にそうは思いません。『ル・サントール』誌の人たちが〔貴方の〕『エル・ハジ』を評価しなかったとすれば，彼らには残念なことでしたが仕方ありません。お分かりのように，第1の過ちは彼らのグループに入ったこと。第2の過ちはそこに復帰したこと。そして第3の過ちは……」[19]。いっぽう一両日遅れてジッドから『瞑想の冬』を受け取ったジャムは，翌月2日ないし3日の書簡で，同著がジッド的要素を多く宿すことへの嫉妬を隠さず，この詩人独特の物言いで率直な感想を伝えている――「すでにブーエリエの本にはざっと目を通した。彼のものは『ル・リーヴル・ダール』誌〔ポール・フォールが1892年に創刊した小雑誌〕に載った何ページかしか読んだことがなかったが，対等の存在と認めていた。強い個性は非凡なものに思えたし，彼の霊感は僕を高ぶらせた。しかし嗚呼！ 3分の1が彼自身，もう3分の1がバレス，残りの3分の1が君から成るこんな辞書〔活字の詰まった分厚い本，の謂か〕がまさか僕の元に届こうとは思ってもいなかった。彼にあれほど讃嘆の念を示したことに腹が立つし，傷つきもしている」[20]。

次いで11月4日の出会い――。ジャムとの往復書簡集には編者ロベール・マレが「1897年2月初め」と時期推定する「ブーエリエと午前1時まで過ごした翌日」のジッド書簡が収録されているが，従来大方の研究者は「ナチュリスム宣言」（後述）への言及の欠如と2回目の出会いの蓋然性とを根拠に，これを1896年12月中のものと見なしてきた。しかし彼らの推測もまた明らかに誤りであって，ジャム上掲書簡の記述数カ所との逐条的照応や，とりわけ『白色評論』11月1日号（10月末刊）掲載のジャム詩篇「静寂，次いで一羽の燕が鎧戸の上で……」の断片を冒頭に掲げ，これを「君の最新作」と呼んでいる点から，

当該書簡が最初の出会いの翌日，すなわち 11 月 5 日の証言であることは疑いを容れない[21]。その一節に曰く――

> 君の手紙は受け取った。この手紙はそれへの返事のように見えるが，そうではない，僕は君の詩篇に応答しているのだ。〔…〕昨日，僕は〔アンドレ＝フェルディナン・エロルドが翻訳したアイスキュロスの〕『ペルシア人』を読み，〔次いで〕ブーエリエと午前 1 時まで一緒にいた。その後もまだ起きていた。僕の思うに，ブーエリエのナチュリスムは非常に頑なだ。彼は崇高なものにしか身を委ねず，あらかじめ自分の考えを固めてしまっている。僕が君のいう三者関係を笑ったのはそのためだ。いや，僕は君を彼，彼らと一緒にはしていない。もし彼について語り，（彼らが望むように）この運動について論文を書くことになれば，僕には君のことをこの「運動」に加わる「若者たち」の一員に数えることはできない。そうであるには君は個性的すぎるし，既成の美学に属してはいないからだ。〔…〕[22]

ブーエリエのほうでもジッドとのあいだに気質の決定的な隔たりを感じ，また自らの冷ややかな態度に対話者が意気阻喪するのを承知していた。以下は彼が後年，その著書『偉大なる生への序』（1943 年刊）に残した証言――

> ポール・フォール宅でジッドからお世辞を言われても，私がまるでそこには居らぬかのような態度をとったので，彼は気を悪くしていた。熱のこもった称賛に私のほうも情熱的に応えてくれると期待していたに違いない。〔…〕心情よりも精神によって人を魅了し，かたちある情愛の資質よりは知性のほうを備えた，つまりは「〔生身の〕人間」であるよりも「文学者」である彼にたいし，私はいかなる共感をも覚えることがなかった。彼の狙いは私を魅惑することだった。彼はそれまで私のことを激情的な性格の人間だと思っていたが，私のほうは感情を表に出さなかったのだ。別れるときには我々は互いに失望していた。歩道でありきたりの挨拶を交わしてその場を去った。それぞれ己の思案に立ち戻り，あたかも再会なぞ望まない見知らぬ者どうしのような会釈を交わしたのである。[23]

遠い過去をふり返っての回想なので多少の潤色はあるかも知れないが，それを考慮に入れたとしても証言全体の否定的なトーンは明らかだ。

しかしながら，このような双方の「失望」にもかかわらず，交流は依然として続く。それどころか，翌 12 月に入っての書簡の遣り取りや献本行為だけをとらえれば，彼らは初回の話し合いで互いに共感を覚え，心から再度の意見交換を望んでいるかに見える。まずは 4 日，この時点ではまだブーエリエの住所を知らなかったジッドはフォールを介して次の書簡を送っている[24]――

《書簡 3・ジッドのブーエリエ宛》

〔パリ〕1896 年 12 月 4 日

親愛なる詩人

『レコー・ド・パリ』紙に掲載されたティバルト〔同紙上でのローラン・タイヤードの筆名〕の論文を昨日読んで私が感じた喜びを貴方に申し述べさせていただきたい。私としてはこの論文にまったく異存がないという訳ではありませんが，しかし論文はご高著が当然受くべき永続性を確かに保証するものであると思います。

貴方とお会いできるでしょうか。ポール・フォールが，彼の家か拙宅で我々が再びお会いできるよう，いつの晩がよいかを知らせよと言っています。今すぐには決められませんが，私も貴方との再会を強く望んでおりますので，できるだけ早急に日取りの調整をいたしたく。敬具

アンドレ・ジッド

『レコー・ド・パリ』12 月 2 日号掲載のタイヤードのブーエリエ評「英雄の誕生」[25] に触発されての書簡だが，若干の留保は付しつつも，詩人を高く称揚する同論に賛同し，文通者との「再会を強く望む」というその文言は，前月のジャムを相手の忌憚ない感想とは何と大きな違いを見せることか[26]。

4 日後のブーエリエの返書もまた，気乗り薄の気ぶりも見せず，相手への熱い共感と関心を明言する――

《書簡 4・ブーエリエのジッド宛》

〔パリ〕ガヌロン通り 12 番地，1896 年 12 月 8 日

親愛なるジッド，私には貴方の友情がたいへん嬉しく，また貴方がそれを形をもって示してくださるだけに私の喜びはいや増すところです。私の友情の方も幾分かはお信じください。近々お会いできることを期待しております。〔それにしても〕互いの著作，そのまだるい仲立ちによるのとは別に，我々が〔もっと直接に〕友情を交わし合うことはできないものでしょうか。敬具

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ

おそらくこの書簡を受け取ってからであろう，ジッドはブーエリエに刊出して間もない『ユリアンの旅・パリュード』第 2 版合冊本（11 月 16 日刷了）を贈っている[27]。次はそれにたいする礼状――

《書簡 5・ブーエリエのジッド宛》

1896 年 12 月 12 日

親愛なるジッド，ご高著の前扉に何故こんなありきたりの献辞をお入れになるのでしょう。拝受したばかりですが，私は『ユリアンの旅』を，そして『パリュード』を読みました。両作品の断章はすでに存じていました[28]。

率直な物言いをお許しいただきたいのですが，『パリュード』よりも『ユリアンの旅』を好む意見とは逆に，私としては，後者にはまさに文学的な讃嘆の念を覚えるものの，前者の方がはるかに好みです。過度なまでに感覚的で，優しく甘やかなこの小品は傑作だと思います。厚くお礼申しあげます。かつて慌ただしい読み方をしていた〔２つの〕序文にはとりわけ強い感銘を覚えました[29]。敬具

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ

ジッドの「ありきたりの献辞」が如何なるものであったかは，当の刊本が所在不明のため残念ながら現時点では知る術がない[30]。これに続く記述について若干の補説をしておくと，少なくとも『パリュード』(1895 年初版）にたいするブーエリエの讃辞はけっして儀礼的なものではなく，作品がはらむ象徴派への揶揄・皮肉に我が意を得たためだろうか，彼は後年にも「〔当時〕ジッドの２，３の著書，特に『パリュード』は我々を感嘆させた」と述べている[31]。またこの証言で昔日の盟友たちが引き合いに出される点（人称代名詞「我々」の使用）についても，それが事実に合致した記述であることは，やはりジッドから合冊本を贈られたル・ブロンの『パリュード』讃（1896 年 12 月 18 日付ジッド宛書簡）が具体的に証するところである[32]。

その胸の内はともかく，ジッドとブーエリエはいずれもが近日中の再会を希望・提案していた。では実際にふたりはそうした機会をもったのか否か。前述のように，従来少なからぬ研究者は 12 月中の出会いを想定し，なかにはこれを「前月に続く２回目の会談」と主張する向きもあったが，彼らが拠り所とするジャム宛ジッド書簡の時期推定はすでに実証的なレベルで否定された。すると再会の有無を判断しうる資料はもはや他には存在しないのだろうか。けっしてそうではない。互いの交流について後々まで口を閉ざしたジッドとは異なり，ブーエリエは数度にわたり回顧的証言を残したが，実はそのうち最も詳細な内容の新聞記事，『ル・タン』紙 1941 年 8 月 27 日号掲載の「アンドレ・ジッドとの関係」がほとんど常に等閑視されているのだ[33]。この記事の終盤でブーエリエは，フォール宅での最初の出会いに触れたのち，次のように述べている――

それからしばらくして（12 月のことだ）ジッドから手紙をもらったが，今度はもう前ほどには熱のこもらぬ文面だった。彼にはまだ住所を教えていなかったためポール・フォールを介しての手紙だったが，ローラン・タイヤードがパリの某紙に（ティバルトの筆名で）私にかんする華々しい時評を載せたので，丁寧にも祝意を書いてよ

> したのである。また彼は（どちらにするかはまだ決めていなかったが）フォールの家か，彼の家で再び会おうと言っていた。この会合は実際に行われることになる。場所はコマイユ通りの彼の自宅だったと思う。彼は引き続き幾度か私への気配りを示したが，その後は別離とあいなった。[34]

《ジッド書簡３》の内容が忠実に要約されていることから見て，おそらくブーエリエは手元に保存していた同書簡を改めて参照しながら回想を綴ったものと思われる[35]。むろんそのことが直ちに記憶の無謬性を保証するわけではないが，ここで注目すべきは，場所については断定を控えながらも，彼が再会をひとつの事実として迷いなく語っている点だろう。ちなみにコマイユ通り４番地はまさしく当時のジッドの住所であり（３カ月後の翌 1897 年３月，ラスパイユ大通り４番地に転居），それも考え合わせれば記述の信憑性は高い。まず間違いなく両作家は 12 月中（あるいは蓋然性は低いが翌年１月初め）に再び相見えたのである。

年が明けて１月８日，ジッドはブリュッセルに到着，アンドレ・リュイテルス宅で数日を過ごすが，当地滞在中マドレーヌから，「どう考えても貴方はブーエリエの弟子と映って見えることでしょう……（愚か者たちの目には）」[36]という手紙とともに，10 日付の『フィガロ』紙日曜版を受け取る。『瞑想の冬』を高く評価し，ナチュリスムを自然主義の詩的後継と見なしていたゾラの強い推挽をえて，ブーエリエが同紙上で自分たちの主張を広く一般に向けて示したのである[37]。彼自身はことさら「流派」を前面に出したわけではないが，編集長フェルナン・ド・ロデイが付した題名「あるマニフェスト」と前文（リード）「文学の〈最新艇〉，それは《ナチュリスム》。船長に就いたのはサン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ，云々」によって，綱領（プログラム）としての性格は否応なく鮮明なものとなった。『瞑想の冬』や『ナチュリスム試論』の内容を要約した基本教義じたいは，「神の実体」たる「現世界を厳かに歓びをもって享受すること」にあり，その「悦楽や崇高な歓喜，荘重な魅惑」の抽出・描写を詩人の努めとする点では従前と変わるところはない。しかしこの宣言はまた同時に外国人嫌悪と国家主義的美学を露わにするものでもあった。シェイクスピアやショーペンハウアー，ワグナー，イプセン，ニーチェの名を否定的に列挙したのち（ちなみにワグナーをのぞく４者は，そのいずれもがジッドに多大な影響を及ぼした作家・思想家である），ブーエリエは言う――「我々はこれ以上〔外国人への精神

的隷属〕を望まない。思うに，フランス文学にたいする外国人の勝利はドイツ占領軍の侵略にもまして恐るべき邪悪なものであり，我が国にはびこる彼らの思想は民族精神を損なうものである。〔…〕ドイツという国や外国人たちが人民大衆のうちに惹起する敵意を我々もまた斉しく共有しているのだ」。かくのごとくナチュリスムは「土地と伝統の礼讃」，フランス的美質の顕揚，普仏戦争敗北以来の「寛大なる憎悪」によって特徴づけられる。「国家意識の覚醒，土地と英雄たちの礼讃，愛国的情熱の聖別」……。これこそがバレスの思想に通ずる，あるいはむしろバレスの思想を先どりした「マニフェスト」の要諦なのである。

ナチュリスムの〈船長〉は，「2千年来のかなり俗悪な芸術」に代わる「きわめて美しい芸術の誕生」に渾身の力を傾注してきたと自負しつつ，上記の結論を述べるに先立ち，〈乗組員〉として特に4人の名を挙げていた――

> 何人かの若き作家が身を捧げたその文学は，今もじつに力強く，輝きに満ちて見事である。ミシェル・アバディー氏は自らの詩篇において響き豊かで美しい模範例を示した[38]。アンドレ・ジッド氏の魅力もまたそのような感性より発している。甘美な情熱をそなえた優雅にして煌めくばかりの才能だ。モーリス・ル・ブロン氏はその比類なく純粋な文章で知られる。ポール・フォール氏は清澄な頌詩をいくつも著した。かくて青年作家の一群が，厳かな身震いのうちに，すっくと立ち上がるのである。[39]

翌々日（1月12日）には，同じ『フィガロ』紙の第1面冒頭に配された時評で作家・美術史家のギュスターヴ・ラルーメがセナークルやマニフェストへの偏執を嗤い，「4人の兵士と彼らの伍長」（「最少数兵力」の謂の慣用表現 « quatre hommes et un caporal » に掛けた皮肉）から成る新流派を痛烈に揶揄する[40]。この時評が即座に反ナチュリスムの動きを呼ぶわけではないが，マニフェスト発表直後の辛辣な批判はやがて活発化してゆく論争を十分に予感させるものであった。

ではジッドはマニフェストを読んで，どのように反応したのか。外国の文学・思想に多くを負う彼にとって（後の『新フランス評論』誌がまさに「外国文学の積極的受容」を編集方針のひとつに掲げたことを思い起こそう），ブーエリエの説く文化的排外主義は本来ならば到底肯んじえぬものであったはずだ。にもかかわらず彼は，旅先からマニフェストに名指された喜びを伝え，互いの

共感を我が人生の最良事とまで言い切るのである――

《書簡 6・ジッドのブーエリエ宛》

〔ブリュッセル，1897 年 1 月 12 日（または 13 日）〕

親愛なるブーエリエ

妻が貴方のマニフェストをブリュッセルの私の元に送って寄こしました。私のことをかくも甘美な思いやりを込めて語ってくださること，それに対しお礼を申しあげねばならぬとは思いません。なぜなら貴方のことを語って私が得る喜びとまさに同じ喜びを，貴方もこのマニフェストのなかで感じておられると願うものだからです。しかし我々相互の共感は私にとり，他の者たちの呼び方を使えば「文学的経歴」において，私の言い方では我が人生において出会った最良の事柄のひとつだということはここでもまた繰り返し申しあげたい。再会を期しつつ。敬具

アンドレ・ジッド

*

以上のように，ナチュリスムに関心を抱き始めてからほぼ半年の間，ジッドは私的な文通では常にブーエリエを称え，時には過度なまでの美辞麗句を並べるが，公の場において詩人の作品や文学観にたいする評価を明かすことは一度もなかった。こうした状況に変化が生ずるのは上掲書簡から 7 週間後，彼がポール・フォールのナチュリスム批判文に賛同・連署する 1897 年 3 月初めであり，さらに自ら筆を執って反論するのは翌年になってのことだが，その経緯を追うに先立ち，同者が関与したある論争にも触れておこう。というのもこの論争は，ブーエリエたちと近しい関係にあり，また彼ら以上に詩人マラルメを激しく非難するふたりの文学者を相手とするものだったからである。

世紀末的厭世観の漂う詩集『夜の鐘』(1889) で世に出たアドルフ・レッテ（1863 年生まれ）は，第 2 詩集『霧のトゥーレ』を上梓した 91 年頃からローマ通りの「火曜会」に足繁く通ったが，当時流行のアナーキズムへの共鳴とそれに起因する投獄体験を契機として象徴派否認の立場に転じ，ここ 2 年ほどの間，かつては「感嘆すべき詩人」[41] と呼んだ旧師にたいし事あるごとに仮借ない攻撃をくわえていた。最初の矢が放たれたのは，レオン・デシャン創刊の隔週誌『ラ・プリューム』1895 年元日号においてであった。マラルメの近著『音楽と文芸』の書評という体裁でレッテは，詩人を「偽りの深みと表現上の衒学趣味」しか備えぬ，「死に瀕した高踏派（パルナス）の最後の化身」と位置づけ，その「嘆かわしい」「忌むべき」「不吉な」影響を執拗に告発する。人工的なものの拒絶，〈生〉

と〈自然〉の礼讃はまさにナチュリスムと連動する主張であった――「秘儀の衣をまとった亡霊どもがさまよう地下納骨所から抜け出し，生の世界に立ち戻った私はなんと大きな喜びに満たされたことか！〔…〕嗚呼，聖なる自然よ，私は前にもましてそなたを強く愛する……」[42]。翌96年のパリ文壇はヴェルレーヌの死（1月8日）をもって幕をあける。レッテは同年初頭から連載を始めた『ラ・プリューム』の時評欄「諸相（アスペ）」において，ヴェルレーヌ作品に永遠の美を認め，これを褒め称えるいっぽう（2月1日号），わずかな票しか得られず辛うじて後継の〈詩王〉に選出されたマラルメについては，3カ月後（5月1日号），「退廃詩人（ル・デカダン）」と題する長文でまたもや，外界の現実を頑なに拒否するそのナルシス的自閉性を指摘するとともに，過度の形式尊重による意味の欠落を厳しく断罪したのである――「マラルメ氏は偉大な思想家でもなければ偉大な詩人でもない。氏のうちに要約され具体化されているのは，形式への度外れな偏執に支配された流派の衰弱・疲弊した姿である。氏はあまりに言葉を信じすぎたために，言葉によって滅ぼされたのだ」[43]。

年が変わって1897年，レッテの後を承け『ラ・プリューム』で「鑑定（エクスペルティーズ）」と題する文芸時評欄の担当となったルイ・ド・サン＝ジャックが，連載初回（元日号）の「前提的宣言」において，「格別の闘争好き」である旨を告白しつつ，「この嗤うべき偶像に最初に襲いかかり，それを打ち倒すという栄光を担った」前任者の功をたたえ，自らも反マラルメ・キャンペーンに加わる[44]。続いてはレッテが，同誌次号（1月15日）の「自由論壇」に投書し（編集長デシャン宛），最近発表されたマラルメのヴェルレーヌ頌「墓」（『白色評論』誌元日号）の意味不明を揶揄しながら，「挽歌にたいする異様な好み」を理由に詩人を「墓守老人」と呼んで罵る。そして，ここでもまた前〈詩王〉との対比――「ヴェルレーヌは折り紙つきの呪われた詩人である。さんざん苦汁を嘗めたのち，さらにその死によっても，かくのごとき怪しからぬ公言を誘うのだから」[45]。

すでに象徴派の影響を脱し，〈生〉へと大きく舵を切っていたとはいえ，ジッドにとってマラルメは今もなお（そして後々まで変わることなく）文学的高貴の比類なき体現者であった。それだけに旧師に向かって公然と投げつけられた侮辱は，まずなによりも心情の面で許しがたい暴挙だったのである。さっそく彼は『メルキュール・ド・フランス』の編集長アルフレッド・ヴァレットに宛てた公開状のかたちでレッテ，サン＝ジャック両人への反論を草する。末尾に

はポール・ヴァレリー，マルセル・シュオッブ，ポール・フォール，エミール・ヴェラーレンの４名が賛同の言葉を添えていた。ジッドはこの企てをマラルメにも知らせたが，執拗に絡んでくる酔漢のごときレッテには無視・静観こそが最善の策だと諭され，詩人の意見を容れてヴァレットに手紙の返却を請う（そのことは再度マラルメに伝えられる）[46]。しかしながら，すでに編集・組版の作業は完了していたのだろう，手紙は２月１日号の「短信欄（エコー）」に「抗議」の題で掲載されるのである。この公開状の意図をジッドは次のように説明する。すなわち，「決して反駁することのなかった人」に代わって弟子たちがここで抗議しておかなければ，他の時評家も「マラルメ氏は突如として身内の者すべてから見捨てられた」と思いかねないからだ。かかる考えのもと，議論はマラルメ作品の是非ではなく，もっぱら詩人の人となりに絞られる――「私がレッテ氏を非難するのは，その無理解のゆえにではなく，たとえ崇拝者にあらずとも敬意だけは払うべき人物を侮辱するがゆえなのだ。ここでは文学の話題はすべて脇においておく。この御仁たちにとって文学は関係ないからだ」……。そして公開状は「怒りの原因をつくった『ラ・プリューム』誌の無礼」を指摘して終わっている[47]。

レッテはただちにヴァレット宛書簡（２月１日付）のかたちで返答する。１カ月後『メルキュール』（３月１日号）に掲載されたこの反論は，ジッドの抗議が自分の主張を曲解し，感情のみに突き動かされた不当なものだと切って捨てる。彼にとってマラルメが「嘆かわしい助言者，従ってはならぬ手本」であることに変わりはないのである[48]。サン＝ジャックも同じ号にヴァレット宛の短信（２月８日付）を載せ，ジッドに言及しつつ，近々『ラ・プリューム』に独自のマラルメ批判を発表する旨を予告。じっさい同誌３月15日号に発表された彼の時評「鑑定」は，かつての師弟を抱き合わせで非難する内容で，まずはジッドの抗議を非合理的だと執拗に責め立て，次いで近刊の『ディヴァガシオン』を酷評していた[49]。

マラルメにたいする激しい攻撃は翌年まで続き，途中からは詩人擁護の側にロベール・ド・スーザやアンリ・ド・レニエらが加わる論争は『ラ・プリューム』『メルキュール』両誌の鞘当て合戦の様相さえ呈することになるが[50]，ここではジッドに話を絞り，レッテたちにたいする反発が反ナチュリスムの表明へと繋がっていったことをまずは確認しておこう。

ジャン・ヴィオリス（本名アンリ・ダルデンヌ・ド・ティザック）はブーエリエに誘われ運動に参加した弱冠20歳の作家だが（同年，詩集『日々の花飾り』と小説『ときめき』の2作を上梓），その彼が『メルキュール』2月1日号に「ナチュリスムにかんする考察」と題する長い論文を発表し，青年作家たちに向けて「〈ナチュリスム〉という語をできるだけ多くの人々が受け容れるようこの名称を広めよう」と提案した[51]。それにたいし，すでにレッテらの行動に憤慨し，彼らと関係の近いブーエリエ一派にたいしても警戒心を強めていたポール・フォールは，3月2日の『フィガロ』紙（および『メルキュール』3月1日号）に短い手紙を寄せ，ヴィオリス論文の文言を逆手にとって，自分としてはこの種の「きわめて明確かつ限定的な」集団には与せず，一切のレッテルを拒否する姿勢を公にする。この宣言には，ピエール・ルイスやジャム，ヴァレリーをはじめ総勢29名の作家・詩人が賛同し，ジッドもその筆頭のひとりとして名を連ねたのである[52]。

遅まきながらジッドがナチュリストと見なされるのを拒んだのは，フォールや他の宣言賛同者たちと同様，この新流派とマラルメ包囲陣との連動を懸念したためであろう。だが彼の考え方は，実際にはレッテやサン＝ジャックが説くところとさほど遠く隔たっていたわけではない。詩的探求を過度なまでに推進した晩年のマラルメにたいしては擁護の立場を取っていないし，その頑なな反ナチュリスム的姿勢についても決して賛同はしていないのである。にもかかわらず旧師への敬意を優先し，穏やかなかたちではあるがブーエリエ一派との間に距離を置いた要因としては，同じ時期に完成した『地の糧』（2月22日脱稿）の存在がとりわけて大きい。すなわちジッドは，この「血肉の結晶」[53]に先行き不分明な流派の色が着くのを嫌ったのであり，またそれほど新作の出来栄えと独自性に自信があったということなのだ。じじつ3カ月後『地の糧』が出来すると，レオン・ブルムをはじめ多くの論者は，これこそが流派に依存しない唯一真正な「ナチュリスム作品」だと評したのである[54]。

最良の作家は貴兄たちのなかにはいない，そう繰り返し評されるのに苛立ってのことだろう，モーリス・ル・ブロンは翌98年の初夏，詩集『明けの鐘から夕べの鐘まで』を上梓したジャムにこれ以上はないというほどの激しい攻撃をしかける（『ラ・プリューム』6月15日号）。前年3月，「ナチュリスム宣言」に抗して，詩人が皮肉を込めた自身のマニフェスト「ジャミスム」を著し[55]，ブー

エリエらと距離を置いたのが事の発端であった。彼を自陣に誘い込むつもりだっただけに裏切られたとの思いは強く，今やル・ブロンの筆は感情の抑制を大きく欠き，ひたすら執拗な非難・中傷へと走る。曰く，この詩人にはいかなる才能もなく，その名声はナチュリスムに対峙するために象徴派がでっちあげたものにすぎぬ，あるいは，彼はフランス語の文法も詩作の基本も知らぬ，等々[56]。通常の域をはるかに越えた激烈な攻撃は当然のことながら論争の種となり，この所謂「ジャム事件」は以後5カ月にわたって続くことになる[57]。その間，詩人自身は一貫して沈黙を守り，友人たち（フォールやスチュアート・メリル，ゲオン，そしてジッド）に反論を委ねる。いっぽうブーエリエとレッテがル・ブロン擁護の論陣を張った（ただしブーエリエとレッテの個人的な関係は当時すでに相当悪化しており，ナチュリスム内部の結束はともかく，反ジャム陣営全体としては必ずしも堅固な一枚岩だった訳ではない）。

当初ジッドは論争に直接関与することはなかった。たしかにル・ブロンの記事を読むやジャムに手紙を送り，ゲオンか自分のいずれかが近々公に反論すると伝え，また詩人もこれを強く期待していたが[58]，結局は自ら筆を執るのは思いとどまり，フォールに短い抗議文（『メルキュール』7月1日号）を書かせることで好しとしたのである。ル・ブロンは当然ながら反駁してくるが（『ラ・プリューム』7月15日号），これを受けてフォールが同者に宛てて書いた第2の公開状には初めてジッドの名が引かれていた――

> ナチュリスムなどという流派はいっさい存在しない。
>
> 万が一存在するとしても，その領袖になりうるのは唯ふたり，フランシス・ヴィエレ＝グリファンとアンドレ・ジッドしかいない。だがその称号はこの偉大な詩人たちを侮辱することになろう。両者の作品が美しいのは，ただそれが美しいという以外に理由はないのだ。彼らの作品は〈自然〉の愛し方を説いてはいない。〈自然〉への愛は教わるものではないのだ。[59]

ジッドが自身の別格扱いを両手を挙げて歓迎したとは考えにくい。次の段落で触れる「アンジェルへの手紙」でも，彼は一方的にフォールの肩をもっている訳ではないからだ。ル・ブロンのジャム批判にそれなりの「悪意」を認めつつ，フォールの反論状について，売り言葉に買い言葉を返すような遣り取りをとらえ，「嘆かわしい」と一言留保を付しているのである[60]。だがジッドの名を特記する評者はほかにもいた。鋭い皮肉に富んだ巧みな論文「危機に瀕するナ

チュリスム，あるいは象徴派は如何にしてフランシス・ジャムをでっちあげたか」を『レルミタージュ』誌８月１日号に載せたゲオンである――

> ナチュリストの諸氏が欲するのは，決して自分たちの傍らに並ぶ存在ではない。〔じじつ〕このたびは「自然を感じた」といってジャム氏をやり玉に挙げている。〔また以前には〕アンドレ・ジッド氏を「この優美な才能」，ポール・フォール氏を「この詩的な驚異」と呼んでおきながら突如として口を閉ざしたが，その理由たるや，両氏の作り出すものがほとんど自分たちに追随したものではなかったからであり，両氏がブーエリエ氏の門下になるという栄誉を断ったからなのである。[61]

このような経緯を見るかぎり，ジッドは自ら進んでというよりは，否応なく「事件」の前面に押し出され，やむをえず己の態度を表明したという感が強い。じじつ，『レルミタージュ』誌９月号に掲載された，前２回よりも短めの文学時評「アンジェルへの手紙」は決して事を荒立てんとするような過激な内容ではない。「ル・ブロン氏の文学理論ないし気質がジャム氏への評価を妨げたとしても，それは同氏の過ちではなかった」[62] というブーエリエの評言を引き，これに同調するほかは，渦中の詩人について一切言及することがない。またル・ブロンに直接かかずらうのは避け，前年初頭の「宣言」に遡りながら，ナチュリスムの領袖との関係に焦点を絞るのである――

> いったい何時（じ）になったら自由に，また穏やかにナチュリスムの話ができるようになるのだろう。なにか新たな騒ぎが起こるたびに邪魔されてしまう。事情に疎い（少なくともブーエリエ氏本人の話だけに頼りすぎた）何人かの批評家たちが近頃，事の経緯も知らず，私を流派の一員だと思い込んでしまった。この流派はただ私を認めるのも悪くはないと思いついたばかりだったというのに。ブーエリエ氏はさらに賑やかな栄誉を欲して，自分に続くものとして私の名を『フィガロ』紙〔掲載のマニフェスト〕にまで引いてみせた。彼の若き才能を称賛した酬いがそれだったのである。必ずしもこの一件で氏への評価が変ったわけではないが，それからというもの，私は前ほど称賛の念を口にしなくなったのである。[63]

引用最終文に窺えるように，ここには論及対象の全面否定は避けようという配慮が働いている。ジッドは最近の「出来の悪い戯曲や凡庸な詩集」（名指してはいないが同年の『勝利』と前年の『エグレ，あるいは田園のコンセール』のこと）に言及しながらも，ブーエリエの初期作品が示していた「稀有な散文作家の才能」を忘れてはいない。とはいえ彼の筆はどうしても批判のほうへと傾い

てゆく。たとえば，この若き領袖が自信満々で次々と「近刊・準備中」を並べることを睨んだ次のような揶揄――「ブーエリエ氏にあっては，作品にたいする自負が作品〔の制作〕以前に存在している。だが私としては，〔その自負に見合う〕作品が実際に続いてほしいものだと思う」……。性急な判断は避けつつも，ジッドがブーエリエ個人の創作活動について否定的な先行きを予測していることは疑えまい。

だがその点も含め，時評全体の構成にはジッドの確かな意図が反映されている。ル・ブロンとブーエリエを論じた段落を挟んで，前後にはナチュリスムに属する他の作家の近作がとりあげられ，そのいずれもが相応の評価を与えられているのだ。すなわちジッドは，先行の段落でわずか数行の記述ではあるが，ヴィオリスの詩集『ときめき』とジョルジュ・ランシーの小説『マドレーヌ』の「控えめで良質な主張」を称え，とりわけ後者については「抑制の効いた作家意識が大いに期待を抱かせる」と述べる[64]。またウージェーヌ・モンフォールに触れた後続の段落では，「才能は〔ブーエリエより〕限られたもの」だが，おそらくそれだけに「いっそう個人的で独自なものに思える」と好意的な印象を書き記すのである[65]。

かくのごとく，ジッドはナチュリストならば誰でも見境なく批判しているのではない。流派そのものは斥けるも，あくまで各人の作品をもとにした評価に徹する。あるいはむしろ，かかる態度選択こそが今回の一件にたいする我が回答なり，そう示唆しているのだ。クロード・マルタンの見事な表現を借りるならば，この戦略的な時評によってジッドは，フォールのナチュリスム批判への賛同・連署（前年3月）に続いて再び，「関係を絶たずに関係を絶つ」(rompre sans rompre）のである[66]。

*

続く半年間についてはジッドとブーエリエの交流を伝える資料は実質的に皆無と言ってよく，唯ひとつ前者が翌99年3月中旬ゲオンに宛てた書簡に次の関連記述が残るのみである――「〔南仏エクス＝アン＝プロヴァンスで会った詩人ジョアシャン・ガスケ〕はほとんどナチュリスム向きではなく（彼は同派にうんざりしていた），逆に〔ヴィエレ＝〕グリファンや僕とはとても相性がいい。彼自身が僕にくり返しそう言っていたのだ。彼とはナチュリスムについて大

いに語り合った。僕が思うに，ブーエリエの活動はすっかり勢いを失っている」[67]……。だがジッドはそれからさほど日をおかず，当の作家に自作をいくつか送るのである。次はそれにたいする礼状――

《書簡 7・ブーエリエのジッド宛》

〔18〕99 年 4 月

前略

貴方の作品はいつも喜びをもって拝読しています。お贈りくださったテクストはおそらく貴方がこれまでお書きになった最も繊細で希有，最も真実に迫ったもののなかに入るでしょう。とりわけ偽預言者〔『エル・ハジ』のこと〕は味わい深く雄弁な物語のように思われます。

貴方は偉大な天才である，私は絶えずそう申しあげましょう。貴方の霊感が純粋に働くとき，ご著作には心気症的な熱情や神秘的で孤独な憂愁，比類のない尽きせぬ悲嘆の跡が窺われます。ほかの誰も貴方ほどの魅力を備えてはいますまい。貴方の綴る言葉の束は涙のように澄み，文体は清廉にして繊細です。敬具

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ

ブーエリエの真情はともかく，綴られているのは相変わらず手放しの称賛である。ちなみに彼が受け取ったジッド作品数点が何であったかは詳らかでないが，少なくとも『エル・ハジ』にかんしては，3 年前の『ル・サントール』誌第 2 号に全文が掲載されていたプレオリジナルのことである（同テクストが『フィロクテテス』など他 3 篇との合冊刊本として出来するのは，単行版『鎖を離れたプロメテウス』と同じくこの 2 カ月後）。

翌 1900 年の 2 月ないし 3 月前半，ブーエリエの小説『黒い道』がファスケル社から刊出する。著者から献本を受けたジッドは『白色評論』4 月 1 日号で紙数を尽くして同書を論じたが，その内容はまさに酷評と呼びうるものであった。導入こそブーエリエの初期作品への称賛で始まるものの，半ページもすると，新作への期待は裏切られたという苦い思いがこれに取って代わる――

〔…〕デビュー時のブーエリエ氏が文学の復興を全フランスに告げたとき，私は大いに喜んだ。その初期作品は美しく響き豊かで，崇高な茫漠と簡明な倨傲に満ちていた。〔…〕彼は神のごとく進んでいった。彼に近づく者はたちまちその弟子となった。彼はほとんど言葉を発しなかったが，朗唱するかのように文章を書いた。〔…〕小説，戯曲，詩……ひとは期待を込めて待った。彼は終始〔作品を〕予告していた。――ひとは待ち続けた。

そして『黒い道』が出版された……。私は心から進んでこの本のことを賞めるはずであった。称賛の準備はすでにできていたのだ……。しかし嗚呼，まずは本を読んでみようと思った。そして直ちにこの辛い事実を認めざるをえなかった。すなわち，ブーエリエ氏はもはやフランス語が分からないという事実である。[68]

これに続く数ページの記述は，多くの事例を示しながら「綴り字の誤りや文法上の誤り」「言葉にかんする無知」「事物にかんする不正確」「奇妙な文章」等々をこれでもかと言わんばかりに並べ立ててゆく。そして書評は次の一文をもって結ばれるのである――「若き獅子ブーエリエよ，君は吼え損なったのだ！ やり直したまえ，やり直したまえ！」[69]。

書評を読んだブーエリエは，名刺に冷ややかな数行を書き添え，『白色評論』気付でジッドに送った――

《書簡 8・ブーエリエのジッド宛》

〔パリ〕1900 年 4 月〔5 日〕

前略

貴方は私を攻撃するのに，貴方にとっても私自身にとっても相応しからぬ武器をお使いになられた。おそらくいつの日か，そのことにお気づきになることでしょう。それでも私としては，貴方の著作に存する格調と威厳を変わることなく評価し続けましょう。他には何も申しあげますまい。

サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ

だが，その後ブーエリエは『ナチュリスム評論』7 月号に「文学にかんする考察」と題する論文を載せ，まず初めにジッドの批判を故意・無理解にもとづく過ちと述べ，翻って自著の価値を訴える――

毎日のように多くの恐ろしい作家たちから酷評されるが，私は彼らを軽蔑し，無視している。先だっても『黒い道』にかんし，ある優れた作家から激しい攻撃を受けたが，私は歯牙にもかけなかった。

アンドレ・ジッド氏は私について間違いだらけのことを山のように書いた。彼は故意に責めどころを増やし，内容を誇張しようとしたが，結局のところ彼が証明したのは唯ひとつ，無慈悲きわまる敵意だけであった。しかし私は返答しなかった。繊細な作家アンドレ・ジッド氏は『黒い道』の価値を実によく理解していたのだ。そのことを意図的にねじ曲げたのである。[70]

こうした旨を手短に述べたのち，ブーエリエは「ジッド氏が最近送ってきた見

事な小冊子」(『レルミタージュ』5月号に掲載後，単行出版された『文学における影響について』のこと）をとりあげる。そして上掲書簡後段に記した方針の揺るぎなさを示すべく，「彼が私にしたような振る舞いはしない」と宣したうえで，ジッド的影響論の優れた点を多々指摘・称揚したのである[71]。

しかし自作に向けられた賛辞を読み知っても，ジッドには先の主張を譲る気はなかった。以下はそのことを告げたブーエリエ宛の公開状（『レルミタージュ』9月号掲載）――

《書簡9・ジッドのブーエリエ宛》

〔キュヴェルヴィル，1900年8月10日〕

貴方が割のよい役を演じられたこと，そして私が貴方にその元を作っていたことは認めましょう。批判よりは称賛に重きが置かれているほうが心地よいこと，また私のささやかな冊子〔『文学における影響について』〕が貴方にそういった機会を与えたとするならば，大変嬉しく思うことも認めます。貴方には感謝の念を抱かずにはおれず，私は何の迷いもなくその気持ちを申しあげます。貴方〔の近作『黒い道』〕にかんする拙論がいかに激烈なものであっても，貴方は，私の著作に対する評価を変えることもなければ，私の講演録を見事だと思う気持ちにも何ら変わりがない，そう仰ってくださる。だが嗚呼，貴方が寄せてくださるご親切な称賛もまた同じように，『黒い道』が不出来な作品だという私の考えを変えることはないのです。お便りをいただき改めてそう感じ入るだけに，まことに遺憾です。

貴方は，盲目であるか悪意を抱かぬかぎり，特定の本を愛せぬことなぞありえないとの仮定に立って，（貴方自身は細やかな態度で私に接しているのだから）〔見解の相違の原因として私の側の〕個人的不満を話題にしておられる。だが明言いたしますが，決してそうではありません。反対に，万事が私を貴方へと導いていましたし，なおも多くの感情が私を貴方へと導くことでしょう。しかし，どうにも好きになれず受け入れがたい――少なくとも両方が同時の場合は受け入れがたい――2つのことが私をたじろがせるのです。すなわち，成人してさほど間もない貴方に，「久しく前から私は芸術の研究から苦悩は除外されるべきだと思っていた」[72]と書かせてしまう自惚れ，そして無知がそれです。

貴方は，仕事の要諦を会得していない偉大な芸術家という，ありえない模範を示せると思い込んでおられるのです。

貴方は我々の国語を傷つけている，それが私の「個人的不満」です。貴方は（いま読み返しても私には当惑いや増すばかりの異様な文のなかで）サン＝シモンや「誤りだらけの」ユゴーの大胆さを引いておいでです[73]。だが私にはユゴーが誤りを犯しているとは思えませんし，また貴誌最新号〔『ナチュリスム評論』7月号〕では「ロダンが彫像術にもたらした改良とは，動力学の研究を止め静力学の研究に代えたことであった」[74]とお書きですが，はっきり申しあげたい――「つまり筆者の言わんとする

のは，静的均衡の科学から動的均衡の科学への代替である」という同じ文の結びが示すように，貴方は「大胆さ」などによるのではなく〔ただ単に不注意の誤謬から〕，仰りたいこととは正反対のことを述べておられるのだ，と。

貴方は，私がしばしば微笑んでいることを理由に（それが私に向けた貴方の最大の非難ですが），私のことを情熱に欠ける「軽い人間」と見なされた。それは誤りです。笑いは憎悪を妨げるものではないし，また微笑も愛を妨げるものではありません。しかし私の笑いは貴方をご不快にさせるので，ここでは笑うのを止め，率直にお話ししましょう。自らの芸術を愛するがゆえに，私はそれを台無しにしてしまうジュルナリスムを憎みます。このジュルナリスムなる語を私は色々な意味，多すぎるほどの意味で使っていますが，貴方のような生まれながらの作家が対象となる場合には，拙い書き方のことを指しているのです。さようなら。予告しておいでの豪奢な作品群をお待ちしています[75]。それらのご著書がより佳きものであれば，そのことを私ほど喜んで認める者はおりますまい。敬具

アンドレ・ジッド

1900年8月10日

最終段落の「ジュルナリスム」は，創作行為にかんするかぎり放縦や冗漫，あるいは彫琢の欠如とほとんど同義であり，「芸術は制約のなかにあり」を信条とするジッドには到底容認しえぬものであった。その点さえ喚起しておけば，書簡の記述内容についてはもはや贅言を要すまい。

翌1901年の秋，ブーエリエは前々年の『勝利』に続く2作目の戯曲『新キリストの悲劇』をファスケル社から上梓するが，この新作についてジッドは『レルミタージュ』12月号に短い書評を載せている。その一節――

私としては，その素晴らしい才能をもってすれば，彼が我々にした約束をいつかは果たしうるのを今もまったく疑っていない。しかし嗚呼！ 彼の新作が出るたびに私の信頼は減じてゆくのだ。じっさいブーエリエ氏とナチュリストらの大半は，彼が我々に与えたもののうち最も名高いのは〔作品ではなく〕依然として彼の約束であることを認めず，我々が『黒い道』『勝利』そして『新キリスト』に満足しなかったことに驚いているようである。[76]

ジッドは待った。だが評価に値する作品は一向に出てこない。そのような芳しからぬ状況を映してブーエリエとの文通はやがて途絶えてしまう。第3者との書簡においても彼やナチュリスムが話題に上ることは滅多になく，『日記』にいたっては関連記述すら皆無。また後述するジッド蔵書競売目録によるかぎり，ブーエリエからの自筆献辞本も『黒い道』（1900）が最後であった[77]。

1905年，ジョルジュ・ル・カルドネルとシャルル・ヴェレーがおこなったインタビューのなかで，ジッドは以前にもまして決然と流派を否定し，個々の創造的精神の重要性を再度強調している。だが，かかる主張から透けて見えるのは，各人の今後にたいする期待というよりは，むしろそうした望みはもはや捨てざるをえないという苦い認識なのではあるまいか――

> 流派を信奉するのはとりわけ若者たちである。だが実のところ，流派が重要であるなどとは私には考えられない。象徴主義を見たまえ。こんな流派なぞ存在しなかったと，ひとは懸命になって証明しようとした。遅れてやってきた者は自分たちで流派を設立しようとし，そのためには象徴主義は生まれがらにして死んでいたのだと思い込もうとした。しかしながら，仮に流派というものがあるとすれば，象徴主義は疑いなく流派だったのだ。ところが彼らはその理論を認めぬがゆえに，その存在自体を否定した。グールモンやレニエ，〔ヴィエレ＝〕グリファン，そして私自身，その各々の個性が際立ってくるや，彼らは我々を象徴主義者と見なさぬことでしか，この流派を否定できなくなったのである。
>
> しかし，ひとりの人間が流派の後見を要するのは，彼がまだ形成途上である場合だけだ。いったん己を確立してしまえば，他者の目には彼が流派から自由であるかに見える。だからといって流派を否定するならば，それは恩知らずというものだ。〔…〕
>
> 結局，私はこの流派問題にはまったく関心がない。ひとりの人間が興味ぶかく個性的な存在となるのは，流派の束縛を離れたところでしかありえぬからである。[78)]

そもそも流派それ自体がジッドの予想どおり永くは保（も）たなかった。ブーエリエが1911年から翌年にかけ，ル・ブロンやフルリー，アバディーとおこなった運動再興の最後の試みも実を結ぶことはなく，その時点でナチュリスムの命脈は完全に尽きるのである[79)]。

*

かくしてジッドとブーエリエの文通は10年以上にわたり途絶えてしまうが，第1次大戦が契機となって一時的に復活する――。1914年の暮，ブーエリエは政府の芸術関連機関から任を受け，ランスやアラス，サンリスなどフランス各地でのドイツ軍によるヴァンダリスムに抗すべく文化人の結集を図る計画に関与していた。任務とは「曖昧な言葉ではなく確固たる文書のかたちで〔中立国の〕知識人に訴えかける」こと，そしてそのために「思想・芸術方面で最も著名な人士に名を連ねるよう要請する」ことであった[80)]。翌年の3月には「占領

地区でのドイツ軍の犯罪・攻撃をドイツ文化の代表者たちが庇護・隠蔽したこと」に抗議する「フランス知識人のアピール」が発表されるが（週刊紙『ジュルナル・デ・デバ』同月 12 日号）[81]，その準備段階でブーエリエは，長らく没交渉だったジッドに協力を請い，またその知己についても情報を求めていたのである――

《書簡 10・ブーエリエのジッド宛》

〔パリ〕1915 年 2 月

親愛なるジッド

アンドレ・シュアレス（その住所）を探そうとしましたが見つからないでいます。かくて時は経過し，今やあらゆる面で点検を終えたこの仕事は「校了」を打つだけとなりました。私が難儀をしているこの作業で，もしご助力をお願いできるならば，貴方と親交のありそうなシュアレスに一言お書き送りください。彼には住所が分かり次第，校正刷を送付します。

ジャン＝ポール・ローランスから何か返答はあったでしょうか。また彼の名前をリストに加えてもよろしいでしょうか。

親愛なるジッド，先日はいたく感激いたしました。衷心より。敬具

ブーエリエ

17 区，ラ・コンダミーヌ通り 45 番地

文中に名の挙がる画家ジャン＝ポール・ローランスが，ジッドの最初の北アフリカ旅行に同道した親友ポール＝アルベールの父であることは言わずもがな。またブーエリエが「先日いたく感激した」のは，ジッドが対独アピールへの協力を承諾したことにたいしてであろう（ただし後者がこの署名要請に訝しい思いを抱いていたことはシュアレス宛後掲書簡にあるとおり）。

続いては，やはり 2 月中のブーエリエ書簡――

《書簡 11・ブーエリエのジッド宛》

〔パリ〕1915 年 2 月

親愛なるアンドレ・ジッド

ジャン＝ポール・ローランスへの校正刷送付をお望みでしょうか。今回はリストの集計を週末で打ち切らねばなりません。ジャン＝ポール・ローランスについてお願いしていたお返事をまだ頂戴していませんが，もはや発行しなくてはなりません。新たに加わった名前を挙げますと，エミール・ブートルー，〔ポール＝エミール・〕アペル，アンリ・ラヴダン等々。今や発行が急務です。私はソワッソンから帰ったところですが，街は人気がなく爆撃で破壊されており，その悲惨な寂寥のなか，胸の張り裂けるような思いで一夜を過ごしました。

貴方がお望みであり，またシュアレスの住所をご存じであれば，彼にも校正刷を送ることができます。敬具

ブーエリエ

結果的におよそ百名が連署する「フランス知識人のアピール」には，書簡に記されたブートルーやアペル，ラヴダンの名，そしてもちろんジッドの名は載るが，シュアレスの名は見当たらない。その理由はいたって単純，ジッドの指示にもかかわらず，ブーエリエがこの詩人には協力を仰がなかったのである（手は尽くしたがついに連絡が取れなかったというのはまず考えがたい）。当のシュアレスは「アピール」発表直前のジッド宛書簡（3月9日付）で，「私には何の話もなかった。名前を出させてくれとの依頼はなかったのです。あの連中は明日にも私が拒絶したと言いふらすことでしょう」[82] と憤慨を露わにした。これにたいしジッドは14日付の返書で，自身の釈明も兼ねて次のようにブーエリエとの遣り取りを報告している――

ブーエリエ（サン＝ジョルジュ・ド）が私の署名を求めて来たとき，私はいったいどんな集まりに参加することになるのか気懸かりでした。彼はかなり奇妙な顔ぶれのリストを示しましたが，私はそこに貴方の名前がないのに驚きました。

――彼の参加が是非とも必要だとおっしゃるならば，シュアレスと連絡をとりましょう。彼の住所を教えてください，そうブーエリエは言いました。私は番地を正確に覚えていなかったので，カセット通りと貴宅の中庭に面した横の通りの略図を書いてやりました。さらに私は，それでも見つからないときには，〔貴方の版元である〕新フランス評論か，〔エミール・〕ポール，メルキュールに問い合わせることもできるだろう，そう付け加えました。〔…〕

結局この計画について貴方にお話しする時間が取れませんでした。〔…〕

署名はしましたが，私は気が進みませんでした。私の考えを包み隠さず申しあげましょう。貴方の名前がないのを怪しからぬと思ったのと同じくらいに，私は仮に貴方が署名を拒んだとしても然（さ）もありなんと思ったことでしょう。〔…〕[83]

ジッドとの面会からほどなくして，彼が気乗り薄であることなど露も知らぬブーエリエは，配布冊子の出来がいよいよ間近になったことを告げてくる――

《書簡12・ブーエリエのジッド宛》

〔パリ〕1915年3月

親愛なるジッド

用紙の入手難など，製造上の問題による予期せぬ遅延を繰り返していましたが，よ

うやく出来します。土曜か日曜には予定どおり10部をお受け取りになるでしょう。

私が貴方の貴重なアドバイスを最大限に考慮したことは分かっていただけましょう。J・P・ローランスについては，息子のひとりが捕虜となり，彼が胸の張り裂けるような思いでその子を案じているのは，おそらく貴方もご存じでしょう。

クローデルとはかなり頻繁に会っていますが，魅力的な人物です。貴方からのお勧めもありましたが，彼と知り合えたのは実に幸いでした。貴方ご自身にもいずれ時間を見つけて，ご挨拶に伺います。敬具

ブーエリエ

ジャン＝ポール・ローランスの次男でやはり画家のジャン＝ピエールは従軍後まもなくドイツ軍に捕らえられ，1917年の夏まで捕虜生活を余儀なくされた（この体験にもとづき翌年，画集『戦争捕虜』をベルジェ＝ルヴロー社から上梓）。ローランスの名は結局「アピール」には現れないが，それはこの息子の先行きがドイツ批判文書への署名によって危うくなるのを怖れたためではあるまいか。またそのことがジッドの配慮に依るものであった可能性も小さくない。いっぽうクローデルの名は「アピール」に掲載されている（ただし彼とブーエリエの具体的な関係については未詳）。

署名活動が片付くと書簡の交換は再び間遠になるが[84]，およそ2年後，ジッドから手紙を受けたブーエリエは次のような短信を返している——

《書簡13・ブーエリエのジッド宛》

〔パリ〕1917年1月

親愛なるアンドレ・ジッド

貴方のお手紙を拝読し，心から感動しました。人生とは？ 希望とは？ そういった真面目な話題で貴方にお会いしたい。（もし可能であるならば）月曜の朝にお会いできるでしょうか。短く一言いただくだけで結構です。敬具

ブーエリエ

ラ・コンダミーヌ通り45番地

ジッドがどのような内容を書き送っていたのかは不明。人生最大の危機となった前年からの宗教的葛藤や，長びく戦争の重圧が文学を離れたところで彼に筆をとらせたのだろうか。またブーエリエの心の内も容易には窺い知れない。だがいずれにしても，ブーエリエからの希望どおり引き続いて両者が相見えることになったとは考えにくい。ジッドは前年12月初旬からこの先2月の後半までキュヴェルヴィルに滞在していたからである。

大戦中一時的に復活したものの，ふたりの交流は以後4半世紀にわたって途

絶える。そもそも多少なりとも実(じつ)のある関係はとうの昔に終わっていたのである。そのことを象徴的に伝える出来事が1925年に起きる。ジッド自身による蔵書（405点の書籍や手稿）の競売である。戦争を挟みここ15年ほどの間に彼の活動は急速に拡大・多様化し，知名度も以前とは比較にならぬほど上がっていた。1909年には『新フランス評論』をジャン・シュランベルジェやジャック・コポーら5名の作家と共同創刊，また『狭き門』（1909）や『イザベル』（1911），『法王庁の抜け穴』（1914），『田園交響楽』（1919），『贋金つかい』（1926）などを発表し，押しも押されもせぬ大作家の地位を獲得していたのである。問題の競売はそんなジッドが存命中に，経済的困窮などの余儀ない事情によるのではなく，同時代の作家や批評家から贈られていた献辞本を売りに出す，しかもそこに自著の初版本や手稿まで加えるという異例ずくめのもので，文壇内部にとどまらず，広く一般に大きな波紋を投げかけた。とりわけ我々が注目すべきは，この過去の清算・総括の一覧のなかにブーエリエ，ル・ブロン，モンフォールの3名（計21冊）が含まれていることである。かつての主要ナチュリストたちへの最終的な否認宣言であったといって差し支えあるまい[85)]。

*

すでに述べたように，ブーエリエはその晩年，ジッドとの最初期の関係を回想した文章をいくつか発表している。1935年の10月には「ナチュリスムにかんする資料」と題する長い回想を『レコー・ド・パリ』に載せ，ジッドから受けた最初の《書簡1》を全文採録する（彼は同書簡を生前に計4回，活字化ないし写真複製で世に示すことになる。稿末の「書簡一覧」を参照）。それから4年後の1939年11月18日，ブーエリエは『フィガロ』日曜版（「フィガロ・リテレール」）に，再びジッドとの最初期の関係について一文を草した。その最終部分で彼は，「ナチュリスム宣言」のなかでジッドの名を挙げ称えたことに触れながら，後者からの礼状《書簡6》を掲げている。そして筆を擱くにあたり次の一節を書き添えたのである――「長く続く友情を予告するかに見えたこの手紙のあとは，二度とジッドと会うことはなかったと思う。私が悪かったのか，それとも彼のせいだったのか。生まれつき私は極端に隠者的な質(たち)なので，そのため生涯ずっと無愛想な人嫌いになってしまった。ものごとは何に由来す

るのだろう。そして如何なる神秘的な法則が我々各人の生を司っているのだろうか」[86)]……。

ドイツ軍のパリ占領後，居を移していたニースでこの記事を読んだジッドは直ちにブーエリエに次の書簡を送った――

《書簡 14・ジッドのブーエリエ宛》

ニース，ヴェルディ通り 40 番地，〔19〕39 年 11 月 19 日

では何と，ブーエリエ！ 貴方は私を恨んでいないと仰るのですか？ 貴方は私が貴方にたいし厳しい，極めて厳しい態度をとったことをお忘れかのようです。だが私の方は忘れることはできません。今日は昨日付の『フィガロ』に載ったご高論の懇切なご厚意に感じ入っておりますだけになおさらです。このように貴方は万人に，遺恨を抱かぬという素晴らしい教訓，貴方にはこの上なく誉れとなり，私を深く感動させる教訓を示してくださる。真に高貴で，最も修養を積んだ人たちだけがなし得ることです。このような模範は，稀であるだけになおのこと貴重です。

私が何の底意もなく心からそうするのだとご理解いただけるなら，私は貴方と握手を交わせればと存じます。

人生は我々に多くの悲しみをもたらす一方，若干の喜びもまた与えてくれます。今日の喜びはまさにそのひとつ。衷心よりお礼申しあげます。

アンドレ・ジッド

ジッドがとった「極めて厳しい態度」とは明らかに 40 年前の『黒い道』書評のことだが，しばらくして彼のもとには次の返書が届く――

《書簡 15・ブーエリエのジッド宛》

1939 年 11 月 27 日

親愛なるアンドレ・ジッド

貴方を見出し嬉しく思います。まさに今こそ我々は近い間柄となりました。人生は貴方を大人物にした一方，私からは儚い希望と，それに付随していた虚栄心を奪い去りました。私は，貴方の作品のなかに存する美のことごとくが意識の告白，魂の伝記に他ならぬと感じています。

またお会いできればと思います。私は腰をすえて仕事に取りかかる予定ですが，貴方と再び相見え，御手を握ることができれば幸いです。敬具

ブーエリエ

「人生が奪い去った儚い希望と虚栄心」――かつては一派を率いた文学者による諦念の吐露。フランス屈指の大作家となった手紙の受け手はこれを読んで，いかなる感慨を覚えたのだろうか。

ジッドはその後も南仏にとどまり，1942 年 5 月にはマルセイユ経由でチュニジアへと渡ってゆく。かたやブーエリエはその 5 年後，少なからぬ著作にもかかわらず，名声には縁遠いままこの世を去る。両者最後の往復書簡は単なる儀礼の交換に終わり，特段の反響を呼ぶこともなく歴史の流れのなかに沈んでいったのである。

註

1）以下の論述で引用・言及するジッド＝ブーエリエ往復書簡のレフェランスについては，煩瑣なれば逐一の指示は行わない。稿末に「往復書簡一覧」を掲げるので，これを参照されたい。なお一覧中，未刊書簡のレフェランス BLJD はパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫の略号，またそれに続くのは同文庫の整理番号である。

2）以下 2 段落の記述は主として次の先行研究に依拠している―― Michel Décaudin, *La Crise des valeurs symbolistes. Vingt ans de poésie française (1895-1914)*, Toulouse : Privat, 1960, pp. 58-62.

3）ジッド研究の第一人者クロード・マルタンは，『ナチュリスム資料』の発行を計 6 号とするミシェル・デコーダン（前註出典 59 頁）の誤りを指摘し，計 10 号と訂正したが（voir Claude Martin, *La Maturité d'André Gide. De « Paludes » à « L'Immoraliste » (1895-1902)*, Paris : Klincksieck, 1977, p. 169, n. 16），実際にはこの記述も正確ではない。同誌最終号は，1896 年 7－8 月の第 9－10 合併号に続く第 11 号（同年 9 月）である。

4）さらに付言すれば，ジッドは「ナチュリスト」という語がすでにエドモン・ド・ゴンクール『歌麿』(1891) のなかで使われていたことを自筆の備忘に書き残している。Voir le *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*. Avec une préface de M. André Gide. Vente des lundi 27 et mardi 28 avril 1925 (Hôtel Drouot), Paris : Édouard Champion, 1925, p. 40, item n° 200.

5）モンフォールの 1896 年 11 月 5 日および 1897 年 1 月 3 日付ジッド宛書簡（ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 699.1-2，未刊）。同者のブーエリエ観は後年まで変わることがなく，たとえば 40 年近く後の証言でも次のように述べている――「ブーエリエは，髪を伸ばし，凹んだ帽子を被り，端を曲げた大きな杖を手にした羊飼いに似ていた。〔…〕禁欲的な生活を送り，若者特有の欲望には無関心で，いかなる快楽も身に宿さず，生活のすべでが間断ない夢想であったこの青年哲学者は，我々とはその本質が異なるように思われた。我々を越える存在，きわめて高い次元の存在だったのである」(Eugène Montfort, « Quand Bouhélier avait vingt ans », *L'Ordre*, 3 juin 1933, p. 1, col. 1-2)。

6）Lettre de Gide à Jammes, 18 août 1896, dans leur *Correspondance (1893-1938)*,

éd. Robert MALLET [abrégée ensuite : *JAM*], Paris : Gallimard, 1948, p. 81.

7）この書簡にかんして筆者は，印刷テクストのほか，現在は個人蔵のオリジナルにも当たり，封筒の宛名書き・消印を確認した。それによれば，書簡はまずパリ近郊サン＝クルー（セーヌ＝エ＝オワーズ県）に送られ，ついでキャロル（マンシュ県サルティイ），さらにパリ 9 区へと転送されている。消印は発信地キュヴェルヴィル（クリクト＝レスヌヴァル）が 8 月 25 日，サン＝クルーが 26 日，キャロルが 27 日。このことからパリへの転送完了・配達は 28 日以降だったことが分かる。

8）この合併号（1896 年 7－8 月，193–228 頁）の内容を原文目次によって示せば――Saint-Georges de Bouhélier : Préambule à l'Hiver en Méditation [193-210] ; Albert Fleury : Vers Elle（poésie）[211-213] ; Edgar Baes : Le Problème Naturiste [214-217] ; Eugène Montfort : Sylvie（quatre fragments）[218-220] ; Maurice Le Blond : Le Droit à la Jeunesse [221-223] ; Les Livres（par Louis Lambert, Maurice Le Blond, Saint-Georges de Bouhélier）[224-226] ; Les Revues [227-228].

9）Lettre de Jammes à Gide, s. d. [août 1896], *JAM*, p. 83.

10）SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, *Introduction à la Vie de Grandeur*, Paris : Édouard Aubanel, 1943, p. 241.

11）ブーエリエ証言の出典は，後註 24 に示す新聞記事の第 3 頁 1 段。

12）Lettre de Gide à André Ruyters, s. d. [4 octobre 1896], dans leur *Correspondance (1895-1950)*, éd. Claude MARTIN et Victor MARTIN-SCHMETS, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2 vol., 1990, t. I, p. 13. ただし，ジッドがこの時までブーエリエばかりかフォールとも面識がなかったという記述はかなり疑わしい。なぜならば，まずフォール自身が後年の『我が回想録』でジッドと知り合ったのは 1888 年のことと述べているし，また仮にこの証言が記憶違いだったとしても，彼の兵役回避をめぐる 1893 年初めの書簡交換を見るかぎり，両者が遅くともその時点で知り合っていたのはほぼ確実だからである（voir Paul FORT, *Mes Mémoires. Toute la vie d'un poète (1872-1944)*, Paris : Flammarion, 1944, p. 9 ; André GIDE - Paul FORT, *Correspondance (1893-1934)*, éd. Akio YOSHII, Tupin-et-Semons : Centre d'Études Gidiennes, 2012, pp. 10-11）。

13）Lettre de Jammes à Gide, s. d. [octobre 1896], *JAM*, pp. 89-90.

14）Voir le *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gidec*, *op. cit.*, p. 62, item n° 346. このジッド宛献本はオランダ紙刷 10 部のうちの 1 冊（豪華版は局紙刷 5 部と合わせ 15 部，普通紙版が 500 部刷られた）。

15）Lettre de Gide à Jammes, s. d. [30 octobre 1896], *JAM*, p. 90.

16）MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 171.

17）Lettre de Paul Fort, citée par BOUHÉLIER, *Introduction à la Vie de Grandeur*, *op. cit.*, pp. 242-243. この書簡によれば，フォールはブーエリエをつうじてル・ブロンにも声をかけたが，結果的に『ナチュリスム試論』の著者は会合には加わらなかった模様。

18）前掲のジッド蔵書競売目録には，自筆献辞の入らない『瞑想の冬』局紙刷が含まれるが（*op. cit.*, p. 62, item n° 346），おそらくはこれがマドレーヌに郵送されたもの。

19）Lettre de Madeleine à André Gide, citée par MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, pp. 148-149. 同年5月，創刊号の掲載内容をめぐりピエール・ルイスら数名の同人と対立したジッドが『ル・サントール』誌から一時脱退した経緯については，同書132-140頁を参照。

20）Lettre de Jammes à Gide, s. d. [2 ou 3 novembre 1896], *JAM*, p. 91. すでに往復書簡集の編者ロベール・マレはこの書簡の時期を「1896年11月初め」と推定していたが，細部の記述に注目することで，さらにその日付を「同月2日ないし3日」に絞り込むことができる――。書簡中ジャムは劇作家アンリ・バタイユに言及し，「彼については日曜の強情・頑迷な記事（l'article rétif de Dimanche）のほかは何の情報もない」と記すが，これは明らかに11月1日付『ル・ジュルナル』紙日曜版（第1頁4－6段）に載った Raitif de la Bretonne（『ムッシュー・ニコラ』の作者名をもじってジャン・ロランが同紙でもちいていた筆名）の連載コラム「ペルメル週報 Pall-Mall Semaine」のことを指す。すなわちこの文言は「（バタイユの近況を報じた）日曜版のレチフの記事」の言葉遊び。いっぽう本文次段落で述べるように，ジャム書簡へのジッドの返答が11月5日のものであることを考え併せると，上記の日付確定が可能となる。

21）このジッド書簡の日付について若干の補説をしておこう――。11月初めのジャム自身やマドレーヌの書簡もまた同様に『白色評論』掲載の詩篇に言及しており，時期的にも明らかにジッド書簡と符合する。まずマドレーヌは同月2日の夫宛で，「『白色評論』に載った実に魅惑的なジャムの詩。これぞ紛れもなく偉大な芸術家です」（カトリーヌ・ジッド女史個人蔵，未刊）と絶讃。また同日ないし翌3日の上掲ジャム書簡は，発表されたばかりの「『白色評論』掲載の僕の最新作」（*JAM*, p. 92. 強調筆者）に触れている。ちなみに大方の研究者とは異なり，クロード・マルタンは主著『ジッドの成年期』で，特段これといった根拠を示すことなく，問題のジッド書簡を「1896年11月5日」のものと断言したが（voir *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 172, n. 25），1997年刊の『ジッド評伝』上巻（*André Gide ou la vocation du bonheur*, Paris : Fayard）では，なぜかこの重要書簡に一切言及せず，また彼が永年編纂・増補改訂を続ける非売版『ジッド総合書簡集』（最新版CD-Romは2009年）にいたっては「1907年2月初め」という現行版書簡集の時期推定をそのまま踏襲している。いっぽうミシェル・デコーダンをはじめとする研究者の日付推定については，もはや実証的に否定されたものと考えるが，参考までに代表的な研究の出典を年代順に示す―― Yvonne DAVET, *Autour des « Nourritures terrestres ». Histoire d'un livre*, Paris : Gallimard, 1948, p. 32 ; Michel DÉCAUDIN, « Sur une lettre inédite de Gide à Saint-Georges de Bouhélier », *Revue des Sciences Humaines*, juillet-septembre 1952, p. 274, n. 2 ; id., *La Crise des valeurs symbolistes*, *op. cit.*, p. 64, n. 29 ; Stuart BARR, « André Gide and the *Naturistes* », *Australian Journal*

of French Studies, janvier-août 1970, p. 44 ; Patrick L. DAY, *Saint-Georges de Bouhélier's « Naturisme ». An Anti-Symbolist Movement in Late-Nineteenth-Century French Poetry*, New York, etc. : Peter Lang, 2001, p. 130 et p. 151, n. 16.

22) Lettre de Gide à Jammes, s. d. [5 novembre 1896], faussement datée de février 1897 par Robert MALLET, *JAM*, p. 100.

23) BOUHÉLIER, *Introduction à la Vie de Grandeur*, *op. cit.*, pp. 244-245.

24) フォールを介しての書簡送付だったことは次の証言による―― SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, « Relations avec André Gide », *Le Temps*, 27 août 1941, p. 3, col. 3（この回想の重要性については後述）。なお，まず間違いなく当該書簡にかんする備忘であろう，前日 12 月 3 日のジッドの日記にはジャムやエロルドの名と並んでブーエリエの名が書き付けられている（voir GIDE, *Journal I (1887-1925)*, éd. Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 242）。

25) Voir TYBALT [pseud. de Laurent TAILHADE], « La Genèse du Héros », *L'Écho de Paris*, 2 décembre 1896, p. 1, col. 1-2.

26) ただしブーエリエは後年，このジッド書簡について「前回ほどには熱の籠もらぬ文面」だったと回想している。Voir BOUHÉLIER, « Relations avec André Gide », *art. cité*, p. 3, col. 3.

27) André GIDE, *Le Voyage d'Urien* suivi de *Paludes*, Paris : Mercure de France, 1896（ach. d'impr. 16 novembre 1896）.

28) ブーエリエが両作品のいずれの断章を読んでいたかは定かでないが，それぞれの初出は次のとおり―― [*Le Voyage d'Urien :*] « Voyage sur l'Océan pathétique »（première partie du *Voyage au Spitzberg*）, dans *La Wallonie*（Liège）, mai-juin 1892, pp. 121-160 ; « Voyage vers une mer glaciale »（troisième partie du *Voyage au Spitzberg*）, *ibid.*, dernier fascicule 1892, pp. 275-292. / [*Paludes :*] L'« envoi » final, sous le simple titre « *Paludes* », dans *Le Réveil*（Gand）, 4e année n° 10, octobre 1894, pp. 393-394 ; « Discours de Stanislas »（chapitre III）, « Discours de Valentin Knox »（chapitre IV）et « Fragment de journal de Tityre »（chapitre IV）, sous le titre « *Paludes*. Fragments », dans *Le Courrier social illustré*（Paris）, n° 4, 16-31 décembre 1894, pp. 31-32 ; un « fragment »（chapitre I）dans *La Revue Blanche*, n° 39, janvier 1895, pp. 35-39 ; « *Paludes*. Chapitre II » dans *L'Œuvre sociale*（Marseille）, n° 4, mai 1895, pp. 6-8 ; « *Paludes*. Chapitre IV » dans le *Supplément français de Pan* de juin-juillet 1895, p. 14. なお，後者の雑誌初出については次の拙稿を参照されたい――「ジッド『パリュード』のプレオリジナル」，『ステラ』第 14 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1995 年 3 月，99–116 頁。

29) 2 つの「序文」の初出は次のとおり―― André GIDE, « Préface pour la seconde édition du *Voyage d'Urien* », *Mercure de France*, décembre 1894, pp. 354-356 ; « Préface pour la seconde édition de *Paludes* », *ibid.*, novembre 1895, pp. 199-204（ただし後者はこの合冊本では「後書き（ポストファス）」として巻末に置かれている）。

30）ここでは仮に「ありきたりの」と意訳したが，原文の形容辞は « lassée ».

31）SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, « Rencontre avec André Gide », *Le Figaro (littéraire)*, 18 novembre 1939, p. 5, col. 1.

32）以下にそのル・ブロン書簡の全文を訳出・引用する（ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 1269.1，未刊）——

〔パリ郊外〕サンクルー，1896 年 12 月 18 日

拝略。ご親切にもご高著をお送りいただき有り難うございました。ご本を拝読し，かつて過ごした甘やかな時間を今またふたたび味わいました。我らの共通の友人ルイ・ルアールと一緒に『パリュード』の甘美にして荘重・神聖なイロニーが放つこの世のものとも思えぬ魅惑に身を委ねた，2 年前の暑く気だるい夏の日々を思い出しました。貴方が高貴で純粋な存在であり，微笑を浮かべながら煩悶された人であるだけに私は貴方に惹かれるのです。ことさら申しあげるまでもない数多の芸術的な理由によっても貴方に惹かれます。また我が友サン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエ（彼の友情こそは我が人生の誉れです）にたいし知的な情熱を覚えておられるだけに，いっそう私は貴方のことを愛するのです。

この手紙では貴方に文学の話をするつもりはありません。私の判断・評価を喜んでくれる友人らのために近々文学論を著すときにも，やはりできるだけ控え目な書き方にするでしょう。そうすることで貴方を称えようと思うのです。

私の感謝と熱き共感の念をお信じいただきたく。

モーリス・ル・ブロン

なお，文中に名を引かれた批評家ルイ・ルアールについては次の拙稿を参照されたい——「〈デラシネ論争〉〈ポプラ論争〉の余白に」，『ステラ』第 31 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2012 年 12 月，287–298 頁。

33）Voir BOUHÉLIER, « Relations avec André Gide », *art. cité* (*Le Temps*, 27 août 1941), p. 3, col. 1-4. この回想に言及したのは今日に至るまでミシェル・デコーダン唯ひとりである。ただし彼は『ル・タン』紙掲載日を「8 月 22 日」と誤記し，この重要証言の記載内容についても実質的に利用しないまま終わっている。おそらくは初見後，出典の不備から文献を再度参照・確認することができなかったためと思われる。また彼は前出のジャム宛ジッド書簡をこの再会時の報告であろうと誤った推測をしている（voir DÉCAUDIN, « Sur une lettre inédite de Gide à Saint-Georges de Bouhélier », *art. cité*, p. 274, et *La Crise des valeurs symbolistes*, *op. cit.*, p. 64, n. 29）。

34）BOUHÉLIER, *ibid*, p. 3, col. 3.

35）なお，《書簡 1》の写真複製をはじめ，受信者自身が生前（1935 年から 46 年にかけて）一部の書簡を公表していること，また未亡人が《書簡 14》のテクストをミシェル・デコーダンに提供していること（voir DÉCAUDIN, *art. cité*, p. 276）から判断して，1947 年に没するまでブーエリエがジッド書簡の全てあるいは大半を手元に保存していたのはまず確実である。

36）Lettre de Madeleine, datée « Paris, 11 janvier [18]97 », citée par Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 172.

37）Voir SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, « Un Manifeste », *Le Figaro*, 10 janvier 1897, p. 4, col. 4-6 et p. 5, col. 1-2.

38）詩人ミシェル・アバディー（1866-1920）は，すでに前年『しみったれ』（*Le pain qu'on pleure*）を上梓していたが，とりわけ 1897 年の『山の声』によって高い評価を獲得する。ブーエリエよりも 10 歳年長ではあったが，この後もナチュリスムの終焉まで一貫して同派の忠実なメンバーであり続ける。

39）BOUHÉLIER, « Un Manifeste », *art. cité*, p. 5, col. 1-2.

40）Voir Gustave LARROUMET, « Manifestes de jeunes », *Le Figaro*, 12 janvier 1897, p. 1, col. 1-3.

41）Voir Henri MONDOR, *Vie de Mallarmé*, Paris : Gallimard, 1941, p. 604.

42）Adolphe RETTÉ, « M. Stéphane Mallarmé, *La Musique et les Lettres* », *La Plume*, 1er janvier 1895, pp. 64-65.

43）Adolphe RETTÉ, « Aspects VIII. - Le Décadent », *ibid.*, 1er mai 1896, p. 275.

44）Louis de SAINT-JACQUES, « Expertises I. - Déclaration préliminaire », *ibid.*, 1er janvier 1897, p. 20.

45）Adolphe RETTÉ, « [Lettre à Léon Deschamps] », dans la rubrique « Tribune libre », *ibid.*, 15 janiver 1897, pp. 62-63.

46）Voir MONDOR, *Vie de Mallarmé*, *op. cit.*, pp. 749 et 751.

47）André GIDE, « Une Protestation », *Mercure de France*, 1er février 1897, pp. 428-430.

48）Adolphe RETTÉ, « [Lettre à Alfred Vallette, du 1er février 1897] », *ibid.*, 1er mars 1897, pp. 628-629.

49）Louis de SAINT-JACQUES, « [Lettre à Alfred Vallette, du 8 février 1897] », *ibid.*, pp. 629-630 ; « Expertises V. - La Protestation mallarmophile de M. Gide et les *Divagations* de M. Mallarmé », *La Plume*, 15 mars 1897, pp. 179-186.

50）とりわけ『ラ・プリューム』はナチュリスムについても支持の姿勢を強め，97 年 11 月にはその特集号を組むまでになる。Voir le « numéro exceptionnel consacré au Naturisme et à M. Saint-Georges de Bouhélier », *La Plume*, 1er novembre 1897, pp. 649-682.

51）Jean VIOLLIS, « Observations sur le Naturisme », *Mercure de France*, 1er février 1897, pp. 304-314.

52）Voir Paul FORT, « [Lette à Alfred Valette] », *Mercure de France*, 1er mars 1897, pp. 627-628, et *Le Figaro*, 2 mars 1897, p. 5, col. 2. このフォールの宣言にたいしヴィオリスは翌月の『メルキュール』に穏やかな反論を載せる（voir Jean VIOLLIS, « [Lettre à Alfred Vallette, du 6 mars 1897] », *Mercure de France*, 1er avril 1897, pp. 187-188）。

53）Lettre de Gide à Francis Jammes, s. d. [fin janvier ou début mars 1897], faussement datée de juin par Robert MALLET, *JAM*, p. 111.

54）Voir par exemple Léon BLUM, « André Gide, *Les Nourritures terrestres* », *La Revue Blanche*, 1er juillet 1897, pp. 77-79.

55）Voir « Un manifeste littéraire de M. Francis Jammes : Le Jammisme », *Mercure de France*, 1er mars 1897, pp. 492-493.

56）Voir Maurice LE BLOND, « La Parade littéraire, II. *Chair*, par Eugène Montfort. – *De l'Angélus de l'aube à l'Angélus du soir*, par Francis Jammes », *La Plume*, 15 juin 1898, pp. 422-425.

57）論争の大筋については例えば次を参照―― Robert MALLET, *Francis Jammes. Le Jammisme*, Paris : Mercure de France, 1961, pp. 219-226.

58）Voir la lettre de Gide du 20 juin 1898, citée par MALLET, *ibid*., p. 224, et la lettre de Jammes, s. d. [fin juin], *JAM*, p. 143.

59）Paul FORT, « [Lettre à Monsieur Le Blond] », *La Plume*, 1er août 1893, p. 479.

60）Voir André GIDE, « Lettres à Angèle, III. Viollis ; Rency. - Tribune libre ; Le Blond contre Fort ; les Naturistes. - Saint-Georges de Bouhélier ; Montfort. [...] », *L'Ermitage*, septembre 1898, p. 212.

61）Henri GHÉON, « Le Naturisme en danger, ou Comment les Symbolistes inventèrent Francis Jammes », *L'Ermitage*, août 1898, pp. 128-129.

62）SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, « [Lettre à Léon Deschamps] », *La Plume*, 15 juillet 1898, p. 464.

63）GIDE, « Lettres à Angèle, III », *art. cité*., pp. 212-213.

64）ヴィオリスとランシーを論じたこの短い段落は，後の単行書版『アンジェルへの手紙』(1900) や『プレテクスト』(1903) では削除される。ちなみにピエール・マッソン編纂・校訂のプレイアッド版『批評的エッセー』はプレオリジナルにもとづき同段落を採録している（voir André GIDE, *Essais critiques*, éd. Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 19）。

65）個々の作品に応じてナチュリストを評価するというジッドの方針は，論評の対象となった作家からも一定の理解を得た。その一例として，「アンジェルへの手紙」を読んだモンフォールがジッドに宛てた礼状を訳出・引用しよう（ジャック・ドゥーセ文庫，整理番号 γ 699.5，未刊）――

〔スイス，ルツェルン州ヴェギス〕1898 年 9 月 21 日

アンドレ・ジッド様

貴方が先頃ナチュリストたちへの評価をお載せになった『レルミタージュ』を拝受いたしました。同誌に先行掲載された不当で度を越した攻撃〔ゲオンの「危機に瀕するナチュリスム，あるいは象徴派は如何にしてフランシス・ジャムをでっちあげたか」のこと〕のあと，貴方は巧みな論法で事態を正常な状態に戻してくださいました。十把一絡げに扱うのではなく，各人を順々に検討され，その違いを浮かび

上がらせておいでです。私のことを好意的に論じていただき，厚くお礼申しあげます。貴方ご自身が〔同年4月21日付書簡（個人蔵，未刊）において〕ご指摘くださったように，これまでに上梓した拙著2点〔『シルヴィー』と『肉体』〕だけで私の将来の価値を測るのは実に難しいことだと存じます。いずれ近いうちにお送りする『愛にかんする試論』が，今少しは私のことを明かし，貴方を筆頭に私がその評価を切望する人々から，おそらくは認めていただくきっかけになるのではないかと存じます。敬具

ウージェーヌ・モンフォール

なお，モンフォールは文中に言及した自著『愛にかんする試論』（翌年オランドルフ社より出来）を後日予告どおりジッドに贈っている。その巻頭に記された自筆献辞は「アンドレ・ジッドに / 美に飢(かつ)えた驚嘆すべき魂に / この愛の書を / モンフォール」（個人蔵刊本）。

66）Voir MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 319. なおブーエリエのほうは，ジッドの時評から2カ月後，長引く論争を収めようとしながらも，『地の糧』を次のように批判している――「私の考えでは，この本は見事な作品とは言えない。大地の事物を謳うためには情熱的な愛が有用なのに，ジッド氏は熱く信じ込むということがまるでない。彼の恍惚感はイロニーを帯びており，そこから彼の弱点が生じているのだ。『ナタナエル』〔『地の糧』〕は私を不快にさせる」（BOUHÉLIER, « Inutilité de la Calomnie », *La Plume*, 1er novembre 1898, p. 626）。

67）Lettre de Gide à Henri Ghéon, 19-20 mars 1899, dans leur *Correspondance (1897-1944)*, éd. Jean TIPY et Anne-Marie MOULÈNES, Paris : Gallimard, 2012, 2 vol. [pagination continue], p. 190.

68）André GIDE, « Saint-Georges de Bouhélier : *La Route Noire* », *La Revue Blanche*, 1er avril 1900, p. 553.

69）*Ibid.*, p. 556.

70）SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, « Observations sur la littérature », *La Revue Naturiste*, juillet 1900, pp. 37-38.

71）Voir *ibid.*, pp. 38-43.

72）SAINT-GEORGES DE BOUHÉLIER, « Rodin », dans le même numéro de *La Revue Naturiste*, p. 1.

73）ジッドはこの書簡を『レルミタージュ』誌で公表するさい，彼が「ブーエリエの異様な文」と形容する一節をそのまま註に引いている。以下がその原文―― « Tous les arguments possibles tirés de l'ethnographie, de la botanique et de la grammaire, ne feront jamais que Hugo, chez qui fourmillent tant d'erreurs, que Saint-Simon, si hardi la construction expressive de toutes ses phrases, sans que toutes sortes d'autres hommes ne soient des poètes parfaits et des géniés véritables. » (BOUHÉLIER, « Observations sur la littérature », *art. cité*, p. 38 ; GIDE, « Lettre à Saint-Georges de Bouhélier », *L'Ermitage*, septembre 1900, pp. 239-240).

74）BOUHÉLIER, « Rodin », *art. cité*, p. 5, n. 1.

75）『黒い道』の略標題紙裏面には「準備中」として著書 6 冊（詩集 1，戯曲 1，小説 3，評論 1）が掲げられている。しかし示された書名を実際にブーエリエが世に問うた著作の一覧と照合するかぎり，そのいずれもが出版されずに終わった模様。

76）André GIDE, « *La Tragédie du Nouveau Christ*, par Saint-Georges de Bouhélier », *L'Ermitage*, décembre 1901, p. 404.

77）Voir le *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*, *op. cit.*, pp. 62-63.

78）Interview accordée à Georges LE CARDONNEL et Charles VELLAY et publiée dans leur recueil *La Littérature contemporaine (1905)*, Paris : Mercure de France, 1905, pp. 86-87. ただし劇作家としてのブーエリエに僅かに残る関心を寄せたのか，1909-10 年に 2 度ほどジッドがブーエリエ作品の舞台上演を鑑賞したことが分かっている（『王の悲劇』〔1909 年 1 月，オデオン座〕と『子供たちのカーニバル』〔1910 年 12 月，芸術座〕）。

79）このナチュリスム再興の試みについては以下を参照―― DÉCAUDIN, *La Crise des valeurs symbolistes*, *op. cit.*, pp. 362-365.

80）ブーエリエの 1914 年 12 月付クロード・モネ宛書簡，個人蔵，未刊。

81）Voir « Un appel des intellectuels français », *Journal des Débats*, 12 mars 1915, pp. 397-398.

82）Voir André GIDE - André SUARÈS, *Correspondance (1908-1920)*, éd. Sidney D. BRAUN, Paris : Gallimard, 1963, p. 73.

83）*Ibid.*, p. 75.

84）ちなみに，同時期のジッド作品のうち『重罪裁判所の思い出』（1914）についてはブーエリエに宛てた自筆献辞本の存在が確認されている（voir le catalogue de la *Bibliothèque de M. Saint-Georges de Bouhélier*. Vente du 30 juin 1943［Hôtel Drouot］, Paris : Ch. Bosse, 1943, p. 19, item n° 280）。上記の署名活動にかんする遣り取りのさいの献本であった可能性が高い。

85）Voir le *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*, *op. cit.*, item n°s 198-200（Le Blond），257-265（Montfort）et 342-350（Bouhélier）. なお，この競売の詳細については次の拙稿を参照――「蔵書を売るジッド―― 1925 年の競売――」，『流域』第 33 号，青山社，1992 年 12 月，14-21 頁。

86）BOUHÉLIER, « Rencontre avec André Gide », *art. cité*, p. 5, col. 2. ただし文中ブーエリエが《書簡 6 》以後は「二度とジッドと会うことはなかったと思う」と記すのは，1915 年の「フランス知識人のアピール」をめぐっての面会（すでに本文で引用した同年 3 月 14 日付アンドレ・シュアレス宛ジッド書簡を参照）を失念した記憶違い。彼にとって，この再会はそれほど印象が薄かったということか。

ジッド＝ブーエリエ往復書簡一覧（書き手・日付／発信地／レフェランス）

1.	G = 24.08.1896	Cuverville	BOUHÉLIER, « Document sur le Naturisme », *L'Écho de Paris*, 15 octobre 1935, p. 5, col. 3-4 ; « Relations avec André Gide », *Le Temps*, 27 août 1941, p. 5, col. 2 ; *Introduction à la Vie de Grandeur*, Paris : Édouard Aubanel, 1943, pp. 240-241 ; *Le Printemps d'une génération*, Paris : Nagel, 1946, p. 320（fac-similé）.
2.	B = 04.09.1896	Paris	BLJD γ 795.1.
3.	G = 04.12.1896	Paris	BOUHÉLIER, *Le Printemps d'une génération*, p. 297.
4.	B = 08.12.1896	Paris	BLJD γ 795.2.
5.	B = 12.12.1896	S. l.	BLJD γ 795.3.
6.	G = 12.01.1897	Bruxelles	BOUHÉLIER, « Rencontre avec André Gide », *Le Figaro (littéraire)*, 18 novembre 1939, p. 5, col. 2.
7.	B = 00.04.1899	S. l.	BLJD γ 795.10.
8.	B = 05.04.1900	Paris	BLJD γ 795.9.
9.	G = 10.08.1900	Cuverville	*L'Ermitage*, septembre 1900, pp. 239-240 ; GIDE, *Prétextes*, Paris : Mercure de France, 1903, pp. 234-236.
10.	B = 00.02.1915	Paris	BLJD γ 795.5.
11.	B = 00.02.1915	Paris	BLJD γ 794.4.
12.	B = 00.03.1915	Paris	BLJD γ 795.6.
13.	B = 00.01.1917	Paris	BLJD γ 795.7.
14.	G = 19.11.1939	Nice	Michel DÉCAUDIN, « Sur une lettre inédite de Gide à Saint-Georges de Bouhélier », *Revue des Sciences Humaines*, juillet-septembre 1952, p. 276.
15.	B = 27.11.1939	S. l.	BLJD γ 795.8.